85-196

新井無二郎編

國漢文及作文類字鑑

附録

漢字類字辨
漢字熟語用例
正字俗字辨
和字畧
國語假字遣歌
字音假字遣大要

明治
43. 6. 27
内交

國漢文及作文類字鑑

緒言

一試みに方今學生の作文を取りて一見せんか、文章の巧拙は姑くおき、「惡しからず」を「足からず」、「重んず」を「思んず」、「無慘を」、「無酸」、「事業」を「丁業」、「美麗」を「美禮」など丶書きて、平然たる者尠からず。されば況や「知識」を「知織」、「慈善」を「滋善」、「實驗」を「實險」、「幸福」を「孝福」など丶書くが如きに至りては實に僕を更ふるも終すこと能はざるの感あらむ。か丶れば、その同訓異義の文字を甄別せんとするが如きは、固より念頭に置く所にあらず。此の如きは獨學生のみにあらず、その官吏たり實業家たる人と雖、誤を傳へて怪まざるもの多し。漢字を使用しながら、意義用法の如何を問はずして、思想交換の機關たらしめんとするは、抑、何等の心ぞ。余生徒のために和漢文

を講じ作文を授くる際、此れが矯正の具に資せんがために、彼此參覈して手錄せしもの、積りて本書となれり。折に觸れて足らざるを補ひ、要なきを刪りなどせしほどに、解說の體裁統一を缺き、粗笨にして蕪雜の誹を免れず。遮莫、元これ便蒙の階梯にして、敢へて博雅の君子に示すにあらず、以て青年學生が、讀書作文上の一助ともなるを得ば、編者の望みや足れり。

一本書は、國語、漢文、作文の參考に資せんがために編めりと雖、專ら實用を旨として、只管專門語には互らず、解釋も簡に從ひて繁を避けたり、されば出典の如きも、擧げたるもあり、擧げざるもあり、旁搜博引の書は世別にあるべし、本書の主とする所は、詳密にあらずして、要領を得るにあり。分量の點に於ても、普通適切とおぼしきものは、大抵蒐集しつれば、多くは不便を感ぜぬなるべし。

85-196

國漢文及作文類字鑑

新井無二郎編

あの部

【ああ】

嗚呼　噫　嗟　吁　咳　嘻

嗚呼、噫、嗟、吁、咳、嘻、惡、その用法廣く、嘆美にも、哀傷にも、悲痛にも、總べて通用す。「サテモ〳〵」と譯す。例 嗚呼、盛なるかな。嗚呼、悲しいかな。痛恨、鬱憤の時に發する辭「エヽ」と譯す。例 噫、斗筲の人、何ぞ算ふるに足らん。感心して發する辭「コレハ〳〵」と譯す。例 嗟、我住むに處なし。怪疑のをりに發する辭。「サリトハ」と一考していふ。例 吁、君何ぞ見ることの晩きや。

怒罵の時に發する辭「チェー」と譯す。例 咳、豎子與に謀るに足らず。悲痛の聲、中心より出づる辭。深く悲む時「ヤイ」といふ聲を出すに當る。例 嘻、子、書を讀みて遊說することなかれ。

惡 驚歎に、怒氣を帶びたる辭。例 惡是れ何の言ぞや。

【あかし】

赤 赤朱丹紅赭緋絳

あか色の中にて、濃淡の中を得たるもの。例 赤地。赤心。赤誠。赤繩。赤裸々。

朱 赤よりも少し色濃きもの。例 朱袍。朱冠。紫の朱を奪ふ。

丹 赤の色濃きもの。丹砂の色にて、稍や黑みを帶ぶ。例 顏は渥丹の如し。

紅 桃色の濃き色にて、べニの色なり。卽ち赤に白を混じたるもの。例 紅梅。紅顏。二月の花よりも紅なり。

赭 べにがら色にて、赤と黑との混合せしもの。赭山。赭石。代赭。

緋 燃え立つばかりの、花々しきあか色。所謂、深紅色なり。例 緋の袴。緋の衣。緋縅。緋鹿の子。緋絨の鎧。

絳 赭の色に同じ。

【あきらか】

明 明昭灼皎晃煥炳諦覈甄

明、昭、灼、皎、晃、煥、炳、諦、覈、甄

晦、暝、昏、暗、闇、昧等の反對の意を有し、その用法廣し。例 明白。明々地。明瞭鮮明。明德。光明。聖明。失明。平明。

昭 明よりは狹義に用ゐらる。例 明德を昭にす。昭々。顯昭。宣昭。

灼 火の燃えたつ如く明かなるにいふ。例 照灼。

皎 明に潔白の意を帶ぶ。例 月出皎兮、詩經。

晃 あざやかに明かなる意。

煥 はなやかに明かなること。例 煥乎有文章、論語。

炳 あり〳〵と見ゆる意。例 炳如。炳乎。

諦 詳明の意。例 諦視。

覈 「アキラカニス」と讀む。紛はしく隱れたること、又は入り組みたることを穿鑿して、其實證を發見する意。例 檢覈。

甄 みわけのつくこと。例 甄別。

【あく】

飽 飽飫厭

十分に滿足する意。厭嫌の意にはあらず。例 德に飽く。食に飽く。

飫 馳走にあくこと。

厭 あぐみ滿ちて、いやになる意。饜と通用す。例 厭忌。厭倦。厭世。

饜 大食して、飽き滿つるなり。例 酒肉に饜いて後反る。

【あぐ】

擧 下の物を取りあぐること。措の意と相反す。猶、他に取行ふの意をも含めり。例 推擧。選擧。一擧手。檢擧。盛擧。美擧。擧行。

揚 風に吹かれて、あがるが如く、飛びあがる意。抑の意と相反す。例 紙凧を揚ぐ。旗を揚ぐ。名を揚ぐ。我武維揚る。宣揚。發揚。激揚。抑揚。意氣揚々。

扛 重き物をさしあぐる意。例 鼎を扛ぐ。

昂 氣のあがること、あふのくこと。例 激昂。軒昂。意氣昂然。

颺 風に乘じてあがることにて、揚に通ず。例 颺言。舟搖々として輕く颺る。

【あざむく】

欺 侮りてだますこと。例 君子は欺くべし、罔ふべからず。詐欺。

詒 紿の字と通用す。單に、だます意。

嘯 謾の字と通用す。漠然たることをいひて、だますこと。例 欺嘯。嘯著。

誕 大言を吐きて、だますこと。妄誕。荒誕。虛誕。

【あし】

惡 善の意と相反す。例 凶惡。醜惡。險惡。好惡。美惡。

凶 吉の意と相反す。「イマ〳〵シキ」意。凶惡。凶器。凶險。

醜 形狀の見苦しきこと。妍の意と相反す。例 醜穢。醜惡。美醜。

慝 心のあしきをいふ。淑の意と相反す。例 姦慝。邪慝。妖慝。讒慝。

【あし】

足 腰より下の總稱。

脚 足のはぎなり。坐する時、うしろへ却くる故に名づく。然れども、兩足とも、兩脚ともいひて通用す。但し、手足とはいへど、手脚とはいはず。

【あした】

旦 日晨朝、

晨 太陽の地平線を離れたる時。例 平旦、旦夕。詰旦。太陽の動き出でたる頃にて、旦よりも早き時刻。例 牝雞晨を告ぐ。清晨。詰晨霜晨。

朝 夜の明けはなれて、太陽を仰ぎ見るの意。旦よりは遲き時刻とす。例 朝夕。一

【あだ】

仇　朝一夕。朝暮。

讐　仇讐。寇　怨敵の人を指す。例仇敵。復仇。言語の上にて相怨むるに至り、互に說破して快とする意あり。例讐敵。手配をして押寄する敵人の稱。例外寇。寇賊。

【あだかも】

恰　よく物の合ふことにて、「シツタリ」と譯す。例恰當。恰、好し。

宛　恰に似て、其意緩し。「サナガラ」と譯す。例宛然。

【あたたかし】

暖　暖氣。暖風。冬暖。

溫　暖からず、暑からず、氣候の人身に適する意。例暖氣。暖風。冬暖。水の熱度の、高からず、低からざる、ぬるま湯をいふ。例溫泉。溫湯。溫暖。轉じて穩かなる性質の人にもいふ。溫順。溫和。溫良。

暄　氣候のあたゝかなるをいふ。三四月頃の氣候。例暄暖。暄溫。

煖　物をあたゝむる意。例煖爐。林間に酒を煖む。輕煖。

【あたる】

煦　日光のために、あたゝかになることにも、氣息にて、あたゝむることにもいふ。例吹煦。和煦。餘煦。

中　中當。矢の的に中るが如く、目的の物に適中する意。例暑氣に中る。瘴癘の氣に中る。百發百中。中毒。的中。

當　當は正面にあたる意にて、兩者相適ひて優劣なきこと。例天下能く當るものなし。相當。適當。正當。恰當。至當。擔當。當初。當年。當局。

方　事にさしあたりて、其時、丁度の意。時刻に關する辭。例此時に方り。方今。

直　相當の義。例夜に直りて圍を潰す。四十萬に直る。

丁　恰もそこへ行當る意。例父の憂に丁る。父母の喪に丁る。

【あづかる】

預　預與。干　參預するにて、その仲間となる意。例國事に預る。預金。預と音義共に同じ。

「ヲカス」とも「モトム」ともよむ字にて、己よりさし出でゝ、其事に關係する

事。例干與。干渉。

「カヽハル」、又は「タヅサハル」意。例事風敎に關る、關係。關聯。

【あつし】

篤　厚敦

篤　強固にする意にて、多く品性の上に用ゐらる。例篤實篤行の士。行を篤くして倦まず、信を篤くして學を好む。病、危篤なり。又熱心なる意にも轉用す。篤學の士。篤志家。

厚　薄に對する反對の語にて、有形無形に通じて用ゐる。篤は行爲の事に關していへど、厚は、事物に對して用心の深きをいふ。例地厚し。禮厚し。厚情の士。溫厚の君子。風俗厚し。

敦　厚よりも、其意深きをいふ。例懦夫も敦くなれり。敦篤。敦厚。

【あつむ】

集　集聚　輳　會　萃　纂　輯

集　衆鳥の木にあつまる意にて、諸方より來會すること。例集合。集會。召集。集注。蝟集。

聚　散の反對にて、一所により合ふ意。集は多數の事に用ゐれど。聚は小數の事に用ゐる。例聚散。聚合。車の矢の轂にあつまる如く、一處にあつまる意なれど、用法狹し。運搬用の車船等のあつまるにいふ。例輻輳。一所へ寄り合ふことにて、あつまるをいふ。同資格の者の。相互にあつまる意なり。例集會。會合。

輳　寄りあつまることにて、「ヨリタカル」と譯す。例拔萃。

會　糸を組む意にて、詩文をかきあつむるをいふ。例編纂。

萃　取りあつめて一纏めにする意。集と音義通用す。例編輯。纂輯。

纂　跡迹蹟址痕踪蹤

輯　歩みたる足あとのある意。例蹤跡。足跡。形跡。名跡。

【あと】

跡　跡に同じ。

迹　跡に同じ。

蹟　跡に同じ。

址　あとのつきて後に遺ること。例墨痕。涙痕。瘡痕。

痕

踪　跡よりも、其意の確ならぬをいふ。例 失踪。踪跡。

蹤　踪に同じ。例 奇蹤。遺蹤。

【あなどる】

侮　心中に人を輕んずること。例 鰥寡を侮らず。侮辱。侮蔑。侮慢。輕侮。

慢　言語動作の上に出して、人を輕んずる意。例 暴慢。慢罵。驕慢。倨慢。侮慢。

易　人を心やすきものにあひしらひて、敬意なきもの。

【あばく】

發　掩へるものを取去りて、下の物を露はすこと。又、かくれたるもの、埋れたるものを明にするにもいふ。例 幽光を發く。廩粟を發く。惡左府の墓を發く。

訐　人の陰事をいひあらはして、公にすること。多くは惡事を摘出するにいふ。例 訐きて以て、直となすものを惡む。

【あはす】

併　一つによせあはす意。例 合併。併合。

戮　力をあはす意。例 戮力。

配　二つをとりあはす意。例 配合。配劑。

合　混合し又は續ぎ合せて、一つの物とする意。合一。合同。合糾。

【あはれむ】

憐　憐憫。哀矜。憐察。憐笑。

憫　「イツクシム」、又は「イトシク」思ふなどの意にて、可愛く思ふことなり。例 花月を憐む。愛憐。

哀　「フビン」に思ふ意。例 民を憫む。憫然。憫笑。

矜　かなしきほど「フビン」に思ふ意。されば憫よりはその意強し。例 士を哀む。哀矜。哀痛。

恤　かなしみ、あはれむ意にて、憫よりも其意深し。例 哀矜。長上の人が、下々の者をあはれむことにて、「目ヲカケル」意。例 愛恤。撫恤。賑恤。

愍　憫と同字なり。

【あふ】

遇　偶然に出であふことにて、ふと行きあふ意。例 奇遇。遭遇。

逢　此方より出迎へてあふ意あるにより、逢迎の熟語あり。又は、時節にあふ意もありて、廢立の際に逢ふなどゝもいふ。例 福に逢ふ。逢著。

遭　時節とあふにも、人に行きあふにもいへど、皆意外の折に用ゐる。例 生れて亂世に遭ふ。火災に遭ふ。遭遇。

値　ある場合にあふこと。例 怒りに値ふ。正に中秋に値ふ。

會　物の一つになる意。例 會合。會議。會話。會計。會社。

合　「ピッタリ」とあふ意。例 符合。吻合。和合。配合。集合。合計。合同。

【あへて】

敢　敢肯　遠慮せず、憚らず、「オシキッテ」事を處するをいふ。例 敢爭。敢爲。勇敢。憚りながらの意に用ゐることもあり。例へば、敢て國恩を忘れんや。の類なり。

肯　肯て河を渡らず。肯て從はず。首肯。

【あまねし】

周　周普　隅から隅まで、行きとゞく意。例 君子は周くして比ならず。周倒。周遊。

普　一面にかゝる意にて、微細に亙るにあらず。廣く一般といふほどのことなり。例 普及。普通。普遍。

徧　一わたり行き渡る意にて、周よりは意淺し。

遍　徧の俗字なり。

浹　水の潤ふが如く、一面に至り極まる意。例 均浹。浹洽。

洽　浹に似て、適合の意を含む。例 德敎洽くして民樂む。

【あまり】

餘　餘剩　餘剩　物の充滿して、殘餘のあるをいふ。例 餘澤。餘慶。餘り添はる義にて、物の定額より多きをいふ。「マダツノウヘニ」と譯す。例 剩材。剩貨。剩餘。

贏　資本以外に、餘分の利益あるをいふ。例 贏利。

【あやふし】

危　危殆　すぐれて高き意。例 危峯。危樓。危坐。危言。「ホトンド」とも訓みて、近しの意。卽ち、將に危難に接觸せんとするをいふ。例

【あやまり】

誤　危殆。殆々乎として殆いかな。

謬　誤謬。過愆。錯訛

心ならずして「シソコナフ」意。例誤認。誤解。誤診。

織物の絲筋の違へる意より轉じて、筋途の取違ひにいふ。例毫釐の差、千里の謬となる。謬見。謬察。謬說。繆とかくも同字なり。

過　惡意なくして、思はずも犯せる惡事をいふ。例過ちては改むるに憚ることなし。過失。過は他動詞にて、「アヤマツ」なり。名詞の時は**アヤマチ**なり。

愆　心得違ひにて、過よりも其意甚重く、罪愆と連用して、殆罪となるべきほどのあやまちなり。例三思して愆を顧みる。愆は過と同じく、「アヤマツ」。「アヤマチ」にて、「アヤマリ」、「アヤマル」に非ず。

錯　彼と此と入り違ひて、相合はぬ意。例錯雜。錯亂。失錯。

訛　習慣の如く、いつとなしにあやまり違へる意。旅を旋とかき、犬を大とかき、從を徙とかくが如きは誤字といふべく、予を干とかき、未を末とかき、己を已とかくが如きは、訛字なり。例訛言、訛傳。

【あらかじめ】

豫　豫逆。事に先ちて早く謀ること。前以て用意すること。例君子患を思ひて豫め之を防ぐ。

逆　豫に似て、少しく異なり。豫は平素より、前以て用意する事なれど、逆は或事件の來るに臨みて、迎へ度ることなり。

【あらし】

粗　粗糲。略暴。精、密の反對、吟味のあらくして、つまらぬこと。例粢糲。糲食。

糲　手ざはりのあらきこと。詳の反對、あらましといふ意。例大略。概略。

略　猛惡にして、順序次第の狼藉なること。例自暴自棄。暴風。

暴

【あらたむ】

改　改革。善惡共に、「シナホシ」て新にする意。例過を改む。改正。改名。變改。改革。

革　この字義は、毛を去りて製せる「ナメシ皮」にて、根本より、「サラリ」とあらたむること。例革命。革新。改革。

悛　過惡を改むる意。例悔悛。改悛。

更　改に似て、度々代ふる意あり。例更易。更代。更衣。變更。更新。

【あらはる】

見　見ゆるもの丶出でたる意。例隱れたるより見る丶はなし。發見。見兵。隱見。

現　見と意義共に同じく、目の前に見ゆるをいふ。例現在。現今。

顯　隱微ならずして、光り見はる丶意。例顯達。貴顯。顯榮。

著　明白に見ゆる意。「アラハル」、「アラハス」、「イチジルシ」など訓む。例著述。著明。著作。顯著。著姓。

形　隱れたるもの丶出できて、形の見ゆる意。例中に誠あれば、外に形る。形狀。形體。形骸。

露　掩蔽物を取りのけて、「ムキ出シ」にする意。例露出。暴露。露見。露臺。露店。

表　裏の反對にて、裏にありしものを、表に出して見する意。例表出。表彰。意表。

彰　事物のあや、模樣などの、明に外に見ゆる義。例顯彰。彰明。表彰。彰著。

旌　道德工業の盛なる者を、諸人に知らしむること。「ハタ」とも訓む。もと「ハタ」を立て丶、功德を人に知らする義より轉用す。例旌表。

暴　日にさらす義。暴露とは、晝は日に照され、夜は露にうたる丶をいふ。俗に外へ「サラケダス」といふ意に轉用す。

覺　今迄氣付かざりしことに、始めて心付きたること。例發覺。

【あらふ】

洗　水にて清むること。

濯　あかをとること。例滄浪の水清まば以て我纓を濯ふべし。

滌　あらひながすこと。

【あり】

有　有在。無の反對。何々「ガアル」の意。例こ丶に人有り。甚、盛名有り。有力。有名。有爲。有罪。有數。有志。

在　存在の意にて、何々、「ニアル」といふ事。物體の在る場所を指す字なり。例弟妹家に在り。在留。在鄕。在位。在天之靈。

【ある】

荒　蕪

荒蕪　田地を耕作せずして、打棄ておくこと。例荒蕪。荒廢。荒涼。草の生ひ茂ること。例春蕪。青蕪。平蕪。

いの部

【いかに】

如何　何如　奈何　若何（「イカニ」とも、「イカン」とも訓む）

語氣緊しく、「イカガナルワケデアルカ」、といふ如き詰問の意あり。例五十歩を以て、百歩を笑はゞ則ち如何。敢て問ふ、國君、君子を養はんとせば、如何にせば養ふといふべきか。

何如　語氣較緩し。「イカガデアラウ」、「イカガシヤウ」など、緩やかに問ひかくる意あり。例德、何如なれば則ち以て王たるべきか。取らざれば必ず天の殃あらむ、如何せむ。來年を待ちて然る後に已めば如何。

奈何　奈は如何の二音の合したる者にて、一字にて如何の意あり。故に一字の用例も多し。奈何は如何よりも意輕し。

若何　若は如と通用す。如何よりは其意輕し。

【いかだ】

筏　桴

筏、竹木を編みて、舟の代りに水に浮ぶるもの。例我筑水を下つて舟筏を儲ふ。桴、筏の小なるものをいふ。

【いかる】

怒　憤　悲　慍　忿　瞋

怒憤、悲慍、忿瞋、腹立つこと、普通に用ゐられて用法廣し。例怒氣。怒髮。震怒。赫怒。心中に鬱積せる怒の、外に發せるをいふ。例鬱憤。憤怒。憤懣。憤激。發憤。恨怒すること。忌々しく思ふ。くやしがる等の意。例憤悲。瞋悲。心中に、むっとすることにて、怒より輕し。例人知らざれども慍らず、亦君子ならずや。心中に恨怒すること。實に腹だゝしいことぢや、の意。例忿怨。忿悲。忿々。盛怒の氣色に見ゆること。

【いく】

生　活

生、死の反對にて、呼吸せる限は生と稱すべきにて、動靜の如何に關せざるなり。例生氣。生靈。生年百に滿たず。

活　活動にて、生きて運動する意。例活潑。活眼。

【いくさ】

軍　軍師。支那上世に於て、一萬二千五百人の稱。今は、軍陣、軍隊、軍卒等の意に用ゐる。

師　支那上世に、二萬五千人の稱にて、軍の倍數なり。今は、師旅、師團、軍師、等の意に用ゐる。

【いこふ】

息　息をつぐこと。氣をやすむること。例休息。安息。

憩　途中小やすみすること。息よりも時間長し。例休憩。

休　仕事又は務のやむこと。例休日。休暇。休職。萬事休す。

【いさぎよし】

潔　潔屑。汚穢の反對にて、物質の上にも、精神の上にも用ゐらる。例不潔。潔白。淨潔。潔癖。

屑　氣のすゝむこと。こゝろよしとすること。例就くを屑しとせず。降るを屑し、とせず。伍するを屑しとせず。

【いさを】

績　績勳。事業の成就せる者をいふ。例三載績を考ふ。成績。

勳　功勳。功の成就して、身に光彩ある意。例偉勳。勳績。勳功。勳威。

功　思ふ通りに成就せる意。例功勞。功力。偉功。

【いそがはし】

忙　忙。閑の反對にて、用事多く、隙なきこと。例多忙。繁忙。

忽　忽。いそがはしく落付かぬ意。例忽々頓首。行李忽々。一々、拜趨するを得ず。

急　急。緩の反對「セハシ」と譯す。追ひ付かんとして、たるまず、せはしき意。例性急。賢を求むる事急。鴈の飛ぶ事急。

【いだく】

抱　抱。手にてかゝへ持つ意。例抱持。抱負。

懷　懷。ふところに入るゝこと。心に思ひこめてをること。例本懷。述懷。懷抱。懷恨。

擁　擁。周圍をいだきて內にすること。例擁護。大牙を擁す。擁書萬卷。衾を擁して眠る。山川擁塞す。

【いたす】

致輸　致輸。或一定の場所まで、物を届くること。例 書を致す。語を致す。送致。引致。誘致。郵致。舟車などにて、物を運搬しやること。例 輸出。輸入。輸送。輸贏。今日は輸の音を工と誤り呼ぶ習慣となりたれば、習慣に從ふも妨げなし。

【いたむ】

悼痛傷戚慘愴惻悵　悼痛。人の死を、いたみなげくこと。例 哀悼。痛悼。追悼。悼惜。身體の痛むより、總べて事物の切なるに轉用す。例 痛切。痛快。痛歎。痛恨。痛惜。悲痛。傷。身に傷のあるが如く、痛切に悲むこと。例 哀傷。悲傷。毀傷。戚。喜の反對にて、憂へいたむ意。例 哀戚。憂戚。慘。悲しく、むごきさまをいふ。例 慘酷。慘烈。慘害。慘憺。愴。心の底まで悲しく感ずること。例 悽愴。感愴。愴に同じ。例 惻隱。惻怛。惻。

悵　殘念に思ふ、本意なく思ふ、などの意。例 悵然。悵々。惆悵。悵恨。

【いたる】

至到詣造抵臻　至。行き著くこと。及ぶこと。極點のこと、等に用ゐる。例 朝より暮に至る。米艦將に至らんとす。冬至。至誠。至善。至極。至尊。到。達し著くこと。此處より彼處にいたり。彼處より此處にいたるにいふ。例 到著。到來。懇到。精神一到。人間到る處青山あり。詣。伺候の意ありて、此處より彼處に行くこと。例 參詣。長安に詣る。公府に詣る。その意詣に同じけれど、彼處より此處に來ることに用ゐる。例 四方の賓客皆造る。有衆咸造る。抵。至に同じけれど、これは、往來の意に用ゐる。例 江戸より長崎に抵る。臻。聚り至る意。例 敵兵莽に臻る。子孫皆臻る。萬福臻る。

【いつはり】

僞詐　僞詐。僞又は眞の反對。例 虛僞。僞作。僞朝。僞造。詐僞。誠實の反對。人を欺き虛言を吐くこと。僞よりは輕し。例 巧詐は拙誠に如か

ず、詐術。權詐。詐謀。

いつはりて眞似すること。例 佯りて狂となる。佯り死す。

思慮を廻らして、いつはり欺くこと。例 譎計。譎詐。欺譎。

譎に同じ。例 詭計。詭詐。詭辯。

事實よりも大きくいふこと。例 荒誕。虛誕。妄誕。

安焉惡

いかにして、之で安心が出來やうか、できぬの意。例 泰山崩れば吾安ぞ仰がん。

どうして、そのやうにしやうか、しはせぬと反語に用ゐる。相手をおきて論ずる意あり。例 父子を殺す、焉ぞ慈ならん。父戮子居、君焉用之、左傳。

ドウシテの意。先方を輕蔑していふに用ゐる。例 爾未學ばず、惡ぞ國家の大事に任せん。

【いと】

糸

糸。絲。

細きいと（絲よりも）なり。世に絲と同樣に用ゐれども、誤なり。絲は音「シイ、トと訓じて、糸は音「ベキ」、ホソイトと訓ずれば、全く別字なり。但し、糸も、絲

も、蠶の吐き出したるものにて、其一筋のいとを忽といひ、五忽卽ち五筋を集めたるいとを糸といひ、十忽を集めたるいとを絲といふ。此にてその別を知るべし。糸は細糸。絲はいと類の大小通じて用ゐると心得ても可ならむ。

【いとけなし】

絲

幼稚嬰孩

糸の條を看よ。

幼稚嬰孩

十九歲までをいふ。

十歲前後の小兒をいふ。

みどりごとて、四五歲までの子供をいふ。例 嬰兒。

人を見て笑ふ頃になれる子供をいふ。例 孩提の童。

【いとま】

遑暇閒

他のことまでは、手のとゞかぬ意。例 枚擧に遑あらず。我身だに閒せられず、我後を恤ふるに遑あらんや。

仕事のなくて、ひまなること。例 休暇。人をして應接に暇あらざらしむ。

つれ〴〵なるばかり、ひまなるをいふ。例 閒暇。閒居。

【いぬ】

寢寐　寢寐に就くこと。例就寢。臥寢。

寐　よくねいること。

【いのる】

祈禱　或時に當りて祈るに用ゐる。例雨を祈る。晴を祈る。

平生禱る意。例丘の禱ること久し、と論語にある類なり。

【いはふ】

祝賀　祝　現在より行末かけて、祝ひ祈る意。例祝詞。祝儀。祝言。祝文。祝賀。

賀　吉事に對して、喜びを述ぶること。例賀狀。年賀。慶賀。賀客。

【いはんや】

況　況に同じ。

矧　「マシテ」と譯す。字書に滋也盛也と註せり。

【いふ】

曰　言語を發すること、又、言語を直寫するに用ゐる。或は、物の名、及び物を數へあぐる時にも用ゐる。例孔子曰、孟子曰。詩曰。曰仁。曰義。

謂　思ふことを直ちに、口述すること、又物に名づくるにも、人に話しかくるにもいふ。例殘賊の人之を一夫と謂ふ。子顏淵に謂うて曰く。博愛を之れ仁と謂ふ。誠より明なる之を性と謂ふ。

云　曰に似て稍や輕し。又某がかくいへりと過去のことに用ゐる。又文句の終に用ゐることあるは、云々の意にして語を畧せるなり。例牢曰く子云く吾試みられず、故に藝。余嘉靖の間猾の合たりと云ふ。

言　自己のいふことを主として、相手に重きをおかぬをいふ。例與に仁義を言ふ。顏淵は善く德行を言ふ。

道　我考へを筋道を立てゝ述ぶること。例切るが如く磋くが如き者を學と道ふ。唱道。報道。道破。

【いへ】

家宅　家　廣く建物の稱とす。例家內。家產。家門。家庭。

宅　住處のことにも、土地のことにもいふ。例邸宅。居宅。宅地稅。五畝の宅。

屋　屋根の意より轉じて、如何なる家にても通じて屋と稱す。例馬屋。藁屋。書屋。酒屋。金屋。白屋。板屋。

舍　休息所、多くの人の宿する所の意に用ゐる。例旅舍。客舍。學舍。寄宿舍。

【いほ】

庵　小き草葺の家をいふ。例草庵。禪庵。

廬　小き家の稱。例蝸廬。舊廬。草廬。穹廬。

【いましむ】

戒　前以て堅くあやまらぬやう注意させおくこと。例之を戒むること色にあり。主人賓を戒む。

誡　戒と通用すれども、多くは自動詞として用ゐる。例前車の覆へるは後車の誡め。

警　戒よりも強し。驚かして用心せしむる意。例降水余を警む。職事を警む。警察。警備。警固。

箴　針の正字なり。針を以て病を治するより轉じて、人の不善をいましめ改めしむること、即ち、意見すること、惡を正すことに用ゐる。例口の箴。規箴。箴諫。箴言。

【いむ】

忌諱　忌諱。嫌忌と熟して、憎みきらふをいふ。例禁忌。忌中。差合を避け憚かる意。例忌諱に觸る。君の惡を諱む。尊者のために諱む。死を諱む。

【いやし】

賤　貴の反對。物價の安きより轉じて、下等なるにいふ。例賤業。賤妾。賤劣。下賤。

卑　尊の反對。尊敬すべからざる者の稱。貴賤は、身分等級の上の區別なれども、尊卑は人格の上より區別せること。爵位官祿高くとも、德行なければ、卑といふべし。例卑劣。卑近。卑見。卑下。

鄙　都に對する語。田舍めきて粗野なるにいふ。例鄙人。鄙者。鄙野。邊鄙。土地の狹き意より轉じて、動作、拙劣、心事の狹小なるをいふ。例孤陋。固陋。

陋　陋巷。陋習。陋屋。拙陋。

【いゆ】

癒痊疾　病の日毎に快くなりゆくをいふ。

痊　病の輕快となれるをいふ。

疾　病の全くいえたるをいふ。

【いよいよ】

愈彌　漸次に一つ〳〵增進する意。增減共に用ゐる。

彌　增益、減少共に用ゐること、畧愈に同じ。

【いる】

入納容　入、納、容　出の反對。外部より內部に進入すること。例出入。入國。入內。入京。

出すの反對。物を受けいる〳〵義。例收納。出納。受納。

器物の中に物をいる〳〵こと。例容積。內容。

うの部

【う】

得獲　得　失の反對にて、なき物を手に入る〳〵意。例得失。利得。得意。

もと禽獸を、捕獲するより轉じて、首尾よく手に入る〳〵にいふ。得よりもその意甚重し。例獲麟。收獲。

【うう】

植種栽樹藝　植　倒れぬやうに、うゑ立つる意。例扶植。培植。植樹。植字。

種　種子を蒔きて、植うること。例播種。

栽　若木をうゑつけて、手入れする意。例栽培。栽植。

樹　樹木をうゑたつる意。例五畝の宅之に樹うるに桑を以てす。樹立。

藝　小苗をうゑつくるにも、又は善く培ふにもいふ。例藝園。種藝。

【うう】

饑飢饉餓　饑　下の飢と饉と共に、凶作にて、食物のなき意。空腹の意にはあらず。饑は五穀の內にて、二穀の凶作なるをいふ。

饉　畧饑に同じ。されど饑は饑饉と連用して、全く凶年の意なれど、飢は飢渴と連用して、時としては、人の食を得ざることある意。

饉餓　五穀の内にて、三穀の凶作なるをいふ。故に饑よりも其意重し。
空腹の極度にして、食物を食ふ力もなきやうになりたるをいふ。故に餓死、餓莩など丶いふ也。

餒　空腹となりて、「ヒモジサニ」堪へぬ意。

【うかがふ】

窺伺候偵諜　窺伺候偵諜
窺　のぞき見ること。例 管中より物を窺ふ。窺測。
伺　ひそかに様子を見る意。又訪問の敬語とす。例 伺候。窺伺。
候　事の成行をはかる意にて、測候所などは、天氣の變化をはかることなり。又、訪問の敬語ともなす。伺候これなり。
偵　ひそかに様子を視察する意。例 偵察。探偵。
諜　間者を入れて、様子を探ぐること。例 間諜。諜者。

【うがつ】

穿鑿　穿　ほりぬく意。例 穿鑿。
鑿　金屬類を以て、ほる意。「ホリコム」といふに當る。例 開鑿。

【うく】

受承享禀　受　物を受け入る丶意。例 天の祐を受く。受納。授受。傳受。
承　下にありて、上の物をうくる意。例 恩を承く。承露盤。了承。承諾。承知。
享　受に似て、受納の義とす。神佛の供物をうくるには、必、享の字を用ゐる。例 福を享く。年を享く。祭れば則ち鬼之を享く。魂彷彿として來り享けよ。
禀　上命をうくるにも、天授のものをうくるにもいひて、略受と同じけれど物を受くるには用ゐず。例 天禀の才。禀性。禀賦。禀受。

【うごく】

動搖撼　動　靜の反對にて、自動詞にも他動詞にも、大小輕重共に甚廣く用ゐらる。例 動物。動止。反動。舉動。鳴動。震動。行動。動亂。
搖　定の反對にて、ゆら〳〵とうごく意。又、心の落ちつかぬ意。例 動搖。搖落。群心搖く。中心搖々。
撼　「ウゴカス」と他動詞によむ。「ユスブル」「ユスル」等の意。例 蚍蜉大樹を撼す。天地を撼す。

【うしなふ】

失喪亡

得の反對にて、取り失ふ意。又、「シソコナフ」意にも用ゐる。例時なるかな失ふべからず。過失。失敗。失策。失意。失敬。失德。

事物の見えずなりて、二度取返しがたき意。例親を喪ふ。子を喪ふ。喪家の犬。喪心。

ほろびうせて、原物の片影をも認むる能はざるに用ゐる。例滅亡。死亡。亡國民。亡命。未亡人。

【うすし】

薄非

厚の反對にて德少きにも用ゐる。例薄德。薄弱。薄祿。

野菜の粗惡なるものをいふ。轉じては、厚からざる薄の意に用ゐる。例飲食を非くして、孝を鬼神に致す。非薄。非才。

【うたふ】

歌謠謳唄

聲を長くし、節をつけてうたふ意。樂器に合すにも、合せざるにもいふ。

流行歌をいふ。世間一般にうたふ意あり。例謠曲。歌謠。

長き歌の一節をうたふ意。又、鼻歌をうたふにも用ゐる。例謳歌。

うたひ唱ふること。佛敎の經文を唱へ、和讃をうたふをいふ。例內道場を作り、晝夜梵唄す。

【うち】

中內裏

中

まんなかの意。例中央。中國。中正。

外の反對。場所又は物のうちがはの意。中央も、四方の隅も皆內に含まるゆゑに、中よりは、範圍廣し。例內國。內地。家內。境內。界內。

表の反對。衣服の表裏の意より、人目に立つ公のことを表といひ、人目に隱れたることを裏といふ。例裏面。

【うつ】

伐討征

伐

罪を聲してうつこと。師に鐘鼓あるを、伐といひ、無きを侵といふと左傳に見ゆ。又木をきるにも用ゐる。例征伐。討伐。伐木。伐採。

討

敵の罪科をいひたてゝ討つをいふ。例天有罪を討つ。

征

天子諸侯の罪を正しうつことにて、上より下の順はざるをうつ意。例征討。

打擊撲拍搏撻撾毆

打　征伐。征夷將軍。征韓。征露。

擊　器を以て物をうつ意。その用法廣くして輕し。例打撲。毆打。打破。打診。打擊。強くうつ意。打敲くことにも、打破ることにも、打殺すことにも用ゐる。例擊退。擊殺。擊破。突擊。擊木。擊石。擊仇。小擊の意。輕くほと〳〵とうつをいふ。例螢を撲つ。雪衣を撲つ。香鼻を撲つ。撲盡。相撲。

撲

拍　手のひらにてうつにも、拍子木をうつにも用ゐる。例拍手。

搏　手に力を入れてうつ意。例虎を搏つ。搏擊。

撻　杖にてうつなり。「ムチウツ」と訓む。例鞭撻。

鞭　鉦鼓をうつにいふ。

毆　杖にて人をうつをいふ。

【うづくまる】

蹲　蹲踞、

踞　獸のつくばふやうに、手をつきてをること。例鳳蹲。虎蹲。腰をするて、そり反りをること。例牀に踞す。石に踞す。

【うつす】

移　移遷徙寫摹描謄（自動詞の時はウツル、他動詞の時はウツス）

遷　場所をかふる意。自他共に用ゐる。例移植。河內凶なれば、則ち其民を河東に移す。世變り風移る。移轉。移文。移住。上より下にうつるにも、下より上にうつるにも、高きより低きに、低きより高きにうつるにも、用ゐらる。例幽谷より出でゝ喬木に遷る。孟母三遷の敎。左遷。遷都。

徙　物を避けて、立ちのく意あり。「ウツサル」と他動によむ時あり。例義を聞きて徙ること能はず。

寫　かきうつす意。例寫生。謄寫。寫字。寫眞。物の形を似せうつす意。例摹倣。摹寫。

摹　畫をうつすこと。それより文章に景情をかきあらはすにも用ゐる。例描寫。描畫。描摹。

描　うつしとる意。說文に移寫の謂ひなりと見ゆ。

謄

【うづむ】

埋　

瘞　

塡　

湮　

埋　土を上におほひかぶすこと。例埋葬。埋沒。

瘞　埋に同じ。

塡　物のあきたる處をふさぐこと。例塡塞。充塡。

湮　うめつぶすこと。例木を刋り、井を湮む。湮滅。

【うつむく】

俯　俯ッ俛ベン、

うつむく、ふすと譯す。仰の反對にて、首をさぐること。例俯瞰。俯伏して命を聞く。俯視。

俛　俯よりはなほ一層低く首をさぐること。

【うね】

畝　畝ボウ疇チウ

司馬法にては、六尺を歩とし、百歩を畝とす。又、秦は二百四十歩を畝とす。

疇　田のうねの次第〳〵に並びたるをいふ。例田疇。平疇。荒疇。瓜疇。

【うばふ】

奪　奪ダツ簒サン褫チ

與の反對。强ひて取る意。例强奪。奪取。奪掠。

簒　逆に取る意。下より上のものを奪取することにて、多くは國を奪ひ、天子の位を奪ふなどに用ゐる。例簒弑。簒位。簒賊。

褫　衣服を剝ぎとること。轉じては、與へたるものをとりあぐることにも用ゐる。例勳位褫奪。

【うみ】

海　海カイ洋ヤウ瀛エイ

水の鹹味ある處をいふ。

洋　はてしもなく廣き海のこと。

瀛　大なる海、又そとうみのこと。例大瀛海ありて其外を環る。

【うらなふ】

卜　卜ボク筮ゼイ占セン

龜を灼きて、其のひゞわれの模樣を見て吉凶を定むること。例卜居。卜宅。

筮　蓍を以て吉凶を考へ定むること。後には竹を削りても用ゐる。例筮仕。筮竹。

占　兆を視て問ふこと。兆とは灼きたる龜のひゞわれの模樣をいひ、其模樣を見て吉凶を問ふを占といふ。

【うらむ】

怨　怨エン恨コン憾カン懟ワキタイ

恩の反對。恚、恨、讎等の意を有す。例仇怨。怨憤。私怨。

恨　悲り仇とすることの深き意。又、殘り多く、殘念に思ふ意あり。例史記に、王朔李廣に謂ひて曰く、將軍自ら念ふに、豈嘗て恨むる所あるか、廣曰く、羌降る者八百餘人。吾詐りて盡く之を殺せり、今に至りて大に恨むと。悔恨。悵恨。遺恨。

憾　恨と同じく、悔恨の意に用ゐらるれど、其意淺し。例遺憾。

【う】

懟　互に怨み合ふ意。

賣　售　沽　賈

廣く「アキナヒ」、「ウル」事に用ゐる。又、私利を謀りて、友を欺き或は國の不利を顧みざることにも用ゐる。例商賈。賣買。友を賣る。賣國奴。賣りて既に我手を離れ去り、他人の所有となりたるにいふ。小賈小買をするにいふ。「ウル」と「カフ」と、兩樣に用ゐる。店にてうること。行きて賣るを商といひ、坐して賣るを賈といふ。

【うるはし】

美　麗　妍　娟　艶　妖

美麗。佳麗。麗人。美人。美玉。美服。美名。專ら形色のうるはしきをいへるにて、はでにする意あり。例華麗。うるはし、うつくし、かほよし、みめよし、などいふ意にて、醜の反對。美の字に近けれど、才德事業の事には用ゐず。

「ウルハシ」、「カホヨシ」、「ミメヨシ」などゝも訓む。女色より景色の事に移して用ゐることあり。例嬋娟。娟々蝴蝶過開幔杜詩。

うるはし、うつくし、やさし、などいふに當る。美色の發揚する意ありて、人の心目を奪ふが如き美麗の人の事に用ゐる。例妖艶。嬌艶。艶妻。又豔と書くも同字也。

うるはし、うつくしと譯す。巧、媚、艶の三義を兼ね、女色又は花のことに用ゐる。

【うるほう】

濕　潤　濡　霑　澤

濕潤。濡霑。澤乾の反對。シメル意。例濕氣。燥の反對。うるほひて光澤のある意。例富は屋を潤し、德は身を潤す。河九里を潤す。溫潤。

濡　滴るほどにぬるゝ意。

霑　物を總體にしめらす意。「沾」と書くも通用す。例 涙巾を霑す。汗背を霑す。霑被。霑染。均霑。

澤　潤よりも、甚しく、潤す意。之より轉じて、うるほひて、つやのあるにもいふ。例 潤澤。光澤。滑澤。恩澤。德澤。

【うれふ】

憂　憂愁患恤　心中に苦勞すること。事の起るに先ちて、心配する意あり。又、內部に對してうれふるに用ゐる。例 內憂。杞憂。憂慮。

愁　思ふことありて、心の浮き立たぬ意。例 客愁。旅愁。憂愁。

患　災にあひて、現在其事を苦にせるにいふ。又、外部に對してうれふるに用ゐる。憂は心を主とし、患は事を主とす。例 外患。災患。患難。患苦。

恤　「アハレム」とも訓みて、「フビン」に思ふ意。例 患難相恤ふ。

え(ゑ)の部

【えらぶ】

撰　撰選簡擇　撰選簡擇　善言を撰びて記述すること。卽ち、撰述の意にて、碑文若しくは著述などに謹撰などゝ書す。例 撰著。撰文。

選　多數中よりえり分けて、ぬき出すこと。文選、唐詩選などいふも、多くの詩文中より、其粹を拔ける意なり。例 選擧。選出。選拔。選手。選科。

簡　惡を除き、善を拔き取る意にて、選よりは弱し。例 車馬を簡ぶ。簡閱。

擇　善惡をえり分くる意。例 擇びて仁に處らず、焉ぞ知を得ん。善を擇びて固くこれを執る。擇言。擇行。

【ゑ】

畫　繪圖描　畫繪圖　物の形狀を寫せるもの、彩色の有無に關せず。例 人物畫。墨畫。

繪　彩色せる畫をいふ。元來は、色々の絲にて縫模樣を作れるものゝことなり。例 彩色繪。油繪。錦繪。水彩繪（水彩畫といふはわろし）。

圖　事物の形態を、現實に、正しく寫せるもの。故に圖は實物通りを主とし、畫は實際に加ふるに、多少の想像を加へたるもの。例 地圖。系圖。圖面。見取圖。

描　うつす意。（うつすの條を看よ）。例 描寫。

おの部

【おきな】

翁　翁。婆の對稱にて、年よりたる男のこと。

叟　老人をいへど、先生といふが如き敬稱にも用ゐる。例 叟千里を遠しとせずして來る。

【おく】

置　置措。物を或場所にするおくことにて、在らしむ、居らしむ等の意。例 留置場。物置場所。

措　手を離して下に置くこと。又は棄ておく意。例 舉措之を思うて措くこと能はず。刑措いて用ゐず。

【おくる】

送　送贈。餽餼。饋貽。遺餞。贐。迎に對して、人の去るを送る意。例 送別。送致。送付。

贈　人に物を與ふること。增の字の意ありて、此方よりおくりて、先方の物を增加せしむる意あり。例 贈位。贈呈。

餽　食物をおくる意なれども、之に限るにあらず。兼金一百を餽ると孟子にあるが如し。

饋　食物をおくる意。例 饋食。饋餉。

貽　おくりて先方へ殘し留むる意。例 師說を作りて之を貽る。

遺　物品を先方に置き來る意。與へられたる人より見れば、留め置かれたるもの故に、其の意の熟語最も多し。例 遺訓。遺言。遺物。遺業。遺烈。遺產。

餞　旅行に出發する人に「ハナムケ」をおくること。例 餞別。

贐　餞と意義同じ。

【おこなふ】

行　行將。とりあつかふこと。例 用ゐれば則ち行ひ、舍つれば則ち藏る。

將　氣まゝにしなすこと。例 君と親とには將ふことなし、將へば則ち誅す。

【おこる】

興、起、作　（自動詞の時にはオコル、他動詞の時にはオコス）

興　増大する、盛大となる、衰へつゝある者が反りて盛になる等の意あり。例復興。興隆。中興。再興。勃興。

起　伏したるものゝ、おきあがること。例王者起るあらば、必來りて法を取らん。聖人復起るとも吾言を易へじ。起伏。起臥。起居。勃起。

作　事物の出來始むることにて、即ち漸々に成立する意あり。例天油然として雲を作す。聖人の道衰へて、暴君之に代りて作る。聖王作らずして、諸侯放恣なり。

【おごそか】

莊　嚴儼、上より下に臨む時の敬ふべき姿。威儀容貌を屹度けだかくすること。例莊敬。莊重。莊嚴。

嚴　莊の如く威儀容貌の上にも、政事、法會等の形容にも用ゐる。例嚴肅。嚴明。嚴厲。

儼　威儀の莊嚴なる貌。政事法令等の上に用ゐることなし。

【おす】

推　押壓擠捺

押　おしやる意。又推敲などいふ時は、詩句を鍛錬すること也。例門を推す。戸を推す。推擧。推戴。推究。

壓　上よりおしつくること。又、おさふること。例押送。押署。上よりおしつけて、おしすくむる意。例鎮壓。壓制。壓迫。壓力。抑壓。壓倒。

擠　おしおとす意。例排擠。陷擠。

捺　手に力をこめて押しつくる意。例捺印。押捺。

【おそし】

遲　速の反對にて、らちのあかぬこと。例遲刻。遲延。春日遲々たり。兵は拙速を貴ぶ、巧遲を聞かず。

晏　日のくれかゝること。

晩　日のくれかゝること。又事の早くはこばぬこと。例大器晩成。

【おそる】

恐　懼畏怖怕惶懾悚慄、將來を憂慮すること。恐くは成立せじなどの時は、將來を氣遣ふ助語なり。例恐惶、恐縮。恐怖。

懼　差しあたりて、實地におそるゝこと。「惧」の字も同じ。

畏　甚しくおそるゝ意にて、恐懼よりも深し。謹慎又は服從の意を含む。例 大に民心を畏れしむ。君子に三畏あり、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。畏敬。畏友。畏服。

怖　「オドス」。「コハガラス」等の意。例 巫祝鬼神に依託して、愚民を詐り怖れしむ。汝怖るゝ勿れ、死は命なり。驚怖。恐怖。

怕　懼に同じ。されど、恐の如く俗語に用ゐる。

惶　「オソレ」、「アワテル」意。當惑の意もあり。例 惶惑。恐惶。驚惶。

懾　臆病にて、震ひ慄ぐ意。例 小人は憂ふれば則ち挫けて懾る。懾伏。震懾。

悚　おそれて體をすくめる意。例 悚手。悚然。

慴　恐懼して志を失ふ意、氣の動轉して、分別のなくなること。例 一府中皆慴伏す。

惴　憂ひおそるゝこと。

【おつ】

落墮　落雷。陷落。暴落。

墜　「スベリオチル」、「オチクヅレル」等の意。例 涙を墜す。術中に墜つ。墜落。墜胎。落ちこむ意。又くづれ落つる意。例 星墜ちて木鳴る。祖宗の業墜つ。日月未だ地に墜ちず。

隕　高處より眞直に落つる意。例 星の隕つること雨の如し。世々其名を隕さず。隕石。

零　散り落つる、ふり落つる等の意。例 零露。零落。

【おとす】

威嚇　威嚇喝　勢を以ておしつくること。例 威服。威壓。

嚇　きもだまを抜くこと。例 威嚇。

愒　氣をもますること。例 虚愒。

喝　愒に同じ。

【おどる】

跳踊(踴)躍　上より下に落つることにて。其意廣し。例 落馬。落花。落第。落膽。落命。落胤。落雷。陷落。暴落。

懼　**畏**　差しあたりて、實地におそるゝこと。「惧」の字も同じ。甚しくおそるゝ意にて、恐懼よりも深し。謹慎又は服從の意を含む。例大に民心を畏れしむ。君子に三畏あり、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。畏敬。畏友。畏服。

怖　「オドス」。「コハガラス」等の意。例巫祝鬼神に依託して、愚民を詐り怖れしむ。汝怖るゝ勿れ、死は命なり。驚怖。恐怖。

怕　懼に同じ。されど、恐の如く俗語に用ゐる。

惶　「オソレ」、「アワテル」意。當惑の意もあり。例惶惑。恐惶。驚惶。

懾　臆病にて、震ひ慄ぐ意。例小人は憂ふれば則ち挫けて懾る。懾伏。震懾。

悚　おそれて體をすくめる意。例悚手。悚然。

慴　恐懼して志を失ふ意、氣の動轉して、分別のなくなること。例一府中皆慴伏す。

【おつ】

惴　憂ひおそるゝこと。

落墮墜隕零　落ちて墜ちて墜ちて隕ちて零る。

【おとす】

威嚇愒喝

【おどる】

落　上より下に落つることにて。其意廣し。例落馬。落花。落第。落膽。落命。落胤。落雷。陷落。暴落。

墮　「スベリオチル」、「オチクヅレル」等の意。例涙を墮す。術中に墮つ。墮落。墮胎。落ちこむ意。又くづれ落つる意。例星墮ちて木鳴る。祖宗の業墜つ。日月未だ地に墜ちず。

墜　高處より眞直に落つる意。例星の隕つること雨の如し。世々其名を隕さず。隕石。

隕　散り落つる、ふり落つる等の意。例零露。零落。

零　威嚇愒喝に同じ。

威　勢を以ておしつくること。例威服。威壓。

嚇　きもだまを抜くこと。例威嚇。

愒　氣をもますること。例虚愒。

喝　愒に同じ。

【おどる】

跳踊(躍)

跳　一とびに飛びあがること。例 跳梁。魚跳。

踊　小おどりをすること。例 喜踊。飛踊。抃踊。

躍　踊字は踊字の俗字なり。

【おどろかす】

驚　飛び超ゆること。又唯飛上ることにも用ゐる。例 一躍。飛躍。踊躍。奮躍。

駭　驚駭（自動詞の時にはオドロク　他動詞の時にはオドロカス）

愕　意外の事にあひて、急に心の惑ふことにて、俗にいふ「ビックリスル」意。例 莊公寤生して姜氏を驚かす。左傳。驚惶。驚怖。驚嘆。喫驚。

駭　驚き起つ意にて、驚より強し。例 驚駭。震駭。

愕　周章狼狽の意にて、駭より更に重し。例 荊軻秦王を刺さんとす、秦王柱を環りて走る、群臣皆愕く。驚愕。錯愕。愕然。

【おふ】

追　追逐。追究。追從。追慕。

逐　「オヒカケル」、「オヒツグ」、「後ニツイテユク」等の意。例 追捕。追及。追擊。追懷。追迹。追究。追從、追慕。

趁　「オヒハラフ」、「オヒマハス」等の意。追は「オヒカケ」捕ふる意あれど、逐は「オヒハラフ」のみにて、捕ふる意はなし。例 放逐。逐客。おひかけて、ふむこと。すかさずおふこと。詩に多く用ゐる。例 溪喧し、獺魚を趁ふ。

趕　逐と同義なり。俗語に多し。

【おほいなり】

大　大巨鉅洪浩碩恢宏鴻偉

巨　「オホイナリ」とも、「オホイニ」とも訓む。ダイと濁音に讀む時は、大小の大の意にて、ダイと清音に讀む時は、少の反對にて尊稱となる。細の反對にて、ふときことなり。多くは形狀の上にいふ。例 巨人。巨室。巨材。巨萬。

鉅　巨と同字なり。

洪　纖の反對。纖は物の至細をいふなれば、これは盛大の意あり。例 洪水。

浩　盛大流行の貌。例 浩渺。浩漫。

碩　肥大の意。例 碩學。碩儒。耆碩。

恢　ひろく大いなること。例 天網恢々として、疎なれども漏さず。恢然。恢廓。

宏 大と廣との意を兼有す。例 宏智。宏辯。宏壯。宏麗。

鴻 仰山なる意。例 鴻生鉅儒。鴻雁。鴻儒。

偉 きはだちて見ゆること。例 偉大。偉人。偉業。偉功。偉名。

【おほふ】

覆 覆、蔽、掩、蓋、庇上より「カブセル」こと。例 天覆地載。救覆。フクの音の時はクツガヘル意となる。

蔽 「オホヒカクス」こと、「ヒキマトメル」こと。例 隱蔽。詩三百一言以て之を蔽へば云々。

掩 遮り隱す意。例 掩護。不善を掩ふ。林に掩はれて陣す。

蓋 ふたをするやうにおほふ意。例 蓋世の勇。

庇 「カバヒ」、「オホフ」意。例 庇護。庇陰。曲庇。

【おほむね】

概 概約。概率。概算。オヨソ、ウチヅラシタル所の意。梗概と連用す。例 概算。

率 ナラシ、見ツモル意。

約 括り寄する意にて、大「ダ、リ」といふに當る。

【おもふ】

思 思念。想。憶。懷。惟。思案、慮思する意。思慕、相思などゝて慕ふ意にも、意思とて「コヽロモチ」の意にも用ゐる。例 熟思。愼思。思念。思考。

念 常におもひて忘れぬ意。思よりは其意輕し。例 念頭。觀念。念佛。念慮。

想 かくあらんと推量するにて、「思ヒヤル」、「思ヒマハス」等の意。例 其書を讀みて、尙其人を想ふ。想像。想望。構想。豫想。冥想。夢想。

憶 「オモヒダス」意。例 記憶。友を憶ふ。

懷 「フトコロ」とも、「イダク」とも訓みて、心に籠め、心に祕して思ふ意。例 君子は刑を懷ひ、小人は惠を懷ふ。懷抱。述懷。懷土。追懷。

惟 他念なく、一筋に思ふ意。例 伏惟。恭惟。思惟。

【おもむく】

趣 一方にむくこと。又「ワケガラ」、「オモシロミ」、「コヽロ」等の意あり。例 趣味。志趣。趣意。趣旨。雅趣。

赴趨　ある場所に行くこと。例赴任。心にかけて、はしりゆく意。例拜趨。

【およぐ】泳　水底をくゞる意。

泅　泳に同じ。

游　水上をおよぎ渡る意。

【およぶ】及　先方へ至りとゞく意。

逮　追ひ付く意。例逮捕。逮夜。

迨　逮に同じ。

暨　及の意に同じ。

【おろか】愚　智の反對にて、「バカ」のこと。

癡　「リコウデナイ」の意。白癡といへば、氣抜けのせる全くの馬鹿をいふ。

【をか】魯　不敏、遲鈍の意。俗に「ノロイ」といふに當る。

岡　丘　阜　陵　山の小高き處。地の段をなして、上の平なるをいふ。丘の如くに段をなさず、爪さきあがりに高くなりて、上の平なるをいふ。阜の大なるものをいふ。

【をかす】犯　獸などの、田畑をふみ荒す如く、無遠慮に人の領地にふみ入る意。例法を犯す。上を犯す。顏を犯す。犯罪。犯則。犯人。

侵　漸侵するにて、いつとはなしに、人知れずをかす意。例侵入。侵略。侵害。

干　「モトム」とも訓む。此方より強ひて願ひ、權門などへとり入る意。

冒　物を蒙むりて進む意。又、人の物をとりて、被ぶる意。例矢石を冒す。風雪を冒す。姓を冒す。

【をこたる】怠　惰懈、

怠惰　心ゆるみて、張氣のなきにて、厭ひながらするをいふ。例怠慢、怠惰。

懈　勤の反對。精を出さぬ意。

惰　惰に同じ。

【をごる】

奢　奢侈の反對。衣食住等につきて、過度の美麗を好む意。例奢侈、奢靡。驕奢。

驕　謙の反對にて、自己の才學威福などを、人に誇りたかぶること。例驕慢。驕奢。

驕傲。

侈　約の反對。見えをかざる意。例侈大。

倨　恭の反對。禮法を缺ぎて高ぶる意。例倨傲。倨慢。

傲　人を輕蔑して、ふみつけにする意。例傲慢。傲然。倨傲。

【をさむ】

治　治、修理收斂納藏。例治安。治國。治民。

修　亂の反對。バラ〳〵になれるものを、しづめをさむる意。例修身。修學。修繕。修了。

治績。

惡しき所を、漸々に改善する意。例修身。修學。修繕。修了。

理　筋道を立つる意。例�ぐは以て髮を理む。政平にして、訟理る。家を理む。理解。理事。

收　「取り入ルル」、「シマヒオグ」等の意。例收藏。領收。收穫。收斂。

斂　「カキアツメ」、「トリコム」意。例手を斂めて之を避く。收斂。

納　先方へ大切に入れをさむること。又、「イル、」とも訓む。例納稅。上納。獻納。

受納。

藏　見えぬやうにしまひおくこと。又はくらへかくし入るゝ意。例貯藏。珍藏。藏書。

【をしふ】

教　教育。訓化。教導。教官。

用法廣し。上より下に教ふるにも、平生未來に必要あることを教ふる意にも用ゐる。例教育。教化。教導。教官。

言にて曉し教ふる意。教よりは狹し。

道理を以てをしへ、又、古來の定則に從ひてをしふる意。例兵を教ふるの虛名ありて、兵を訓ふるの實藝なし。古訓是れ式る。訓育。訓導。訓示。

海　教ふる意。例海訓。

訓　訓に同じ。

【をしむ】

惜　惜咨嗇愛

惜咨嗇愛　捨てがたく思ふ意。又、殘り多きこと。例 惜別。愛惜。

「シワイ」の意。例 咨嗇。所有物を失はんことを恐るゝ意。

愛　めでたく思ひて、をしむこと。例 愛別。愛惜。

【をはる】

終　終畢卒了

終畢卒了　始に對する辭。始めより最後までを一體にいふ意。例 終宵。終年。終日。終世。物事のことゞく濟み終るをいふ。終よりも強し。例 畢生。

「シ果セル」意。例 卒業。卒事。卒去。

了　畢に同じ。例 結了。終了。閲了。完了。

【をはることば】

也　也矣焉　語の終におく辭にて、決斷の辭とも、訓釋の辭とも、歷數の辭ともなる。不レ知也、の如きは、決斷の辭。仁者人也、義者宜也の如きは訓釋の辭、修レ身也、尊レ賢也、親レ親也、敬レ大臣也の如きは、歷數辭にて、竝べ立てゝ數ふる意あり。又、一句中に在りて、半は落ちつき緩めて、復起す意となることもあり。其爲レ人也孝弟。の如き是れなり。

矣　語已詞、又、決詞也と註す。也よりは意強く緊し。過去と未來とに用ゐて、現在にはあまり用ゐず。例 使レ子路見レ之、至則行矣、論語、過去、侍坐者請レ出矣、曲禮、未來。

焉　語終詞、又決詞と註す。浮立ちて揚る意あり。例 四十五十而無聞焉、終ル詞。斯天下之民至焉、決スル詞。

【をる】

居　居處　起の反對。立ちたるものゝ坐すること。例 起居、居常。出の反對。其處を離れずに居る意。例 處士。處女。處子。處世の法。

かの部

【か】

乎　乎歟耶夫邪

乎　「カ」とも「ヤ」とも「カナ」とも訓ず。故に疑辭とも、咏歎辭ともなるなり。例 仲尼豈賢於子乎、論語。彈鋏歸來乎、戰國策。中庸其至矣乎、論語。惜乎子不遇時、

歟　乎に同じ。與の字とも通用す。例 求之與、抑與之與、論語。茲非幸與、韓文。可怪也與、韓文。

耶　「カ」、「や」と訓じて、疑問の辭に用ゐる。例 天道是耶非耶、史記。神人尙肯耶、孝武本紀。

夫　「カ」「カナ」と訓ず、咏歎の中に、疑問の意を含む。例 逝者如斯夫、論語。吾知免夫。

邪　耶に同じ。「ジや」の音の時は、「ヨコシマ」の意となりて、これとは別なり。

【かうばし】

芳　香草の總稱。轉じて花、香氣、人の名譽の意にも用ゐる。例 芳香。芳紀十八。芳名。芳芬。

香　かをりの高きをいふ。花にも、焚物の薫にも用ゐらる。例 香氣。線香。抹香。餘香。

馨　香と同じく、香氣の芳烈なるに用ゐらる。

【かうぶる】

被　被蒙に同じ。

蒙　もと寢衣の事なるが、轉じて覆ふ意に用ゐる。例 被服。四表に光被す。全體の見ゆる所なきまで、かうぶる意。又、裹むの意とも冒すの意ともなる。西施も不潔を蒙らば人皆鼻を掩ひて過ぎむ。

【かかぐ】

掲　高く引上げて人に見しむることにも、亦たゞ高くあぐることにもいふ。例 掲示。竿を掲ぐ。衣を掲ぐ。

褰　衣服の裾をまくりあぐるにも、帷幕などの垂れたるを引上ぐるにもいふ。例 帷を褰ぐ。裳を褰げて川を渉る。

挑　かきあげる、はねおこすなどの意。例 燈を挑げて書を讀む。（燈心をかきおこして、明るくする意）。

【かがみ】

鏡　鏡物の形狀をうつすもの。例 檢鏡、破鏡の歎。

鑑　鏡と同義なり。例 龜鑑。鑑戒。

【かがむ】

屈　僂屈。

屈　ゆがみまがること。例尺蠖の屈するは伸びむがためなり。

僂　背をかがむること。

局　ちぢこまること。例天に局し、地に蹐す。

【かがやく】

輝　輝光。例光輝。清輝。

耀　光の遠く照りわたるをいふ。

灼　日月星辰のかゞやくなどにて、輝におなじ。

赫　明白に、燃えたつ如く見ゆる意。例灼然。灼々。

煥　灼に同じ。

【かかる】

嬰　光明の盛大なる意。例煥乎。煥發。

罹　嬰罹。

ひきかゝる事。例人主の逆鱗に嬰る。退嬰。

あみにかゝること。故に禍にあふことにも、病にかゝることにも用ゐる。例百憂に罹る。罹災。

【かき】

垣　垣墻籬藩堵。

墻　土塀の垣よりは高きもの。瓦と瓦との間に土を埋めて築きたるもの。

籬　竹を編みて作りたるかきをいふ。

藩　竹木等を植ゑて、家屋の、めぐりを圍ひたるもの。

堵　垣に似て高きもの。

【かぎり】

限　限期疆。

限　際限。年限。

期　とまりのあること。例期して待つべし。日を期して答へよ。後音を期す。

疆　あてのあること。

さかひのあること。例萬壽疆なし。

【かく】

掛　懸。

懸　家屋のめぐりを、低き築土にて圍ひたるもの。

掛　物を高所にかくることにも、物の高所にかゝりたるにも、自他通じて用ゐる。例冠を掛く。劍を掛く。衣枝に掛かる。思を掛く。物を高くつりかくることにて、自他通じて用ゐる。例籠を梁に懸く。ランプを天井にかく。倒懸を解く。一生懸命。

挂 掛に同し。

係 かかはること。筋目通りにつなぐこと。例 關係。係累。

繫 つなぎとむる意。例 天下の安危繫る。繫縛。

【かぐ】

欠 欠缺闕虧 一定の數の足らざること。例 欠ぐることなく、餘ることなし。欠は音ケンなり、缺と誤用すべからず。

缺 完の反對にて、物の全形を存せぬこと。例 缺勤。缺席。缺點。完全無缺。缺漏。缺禮。

闕 多數中脫落の所あることにて、缺は狹く一部分を顯はせども闕は稍や廣く用ゐらる。例 闕員。闕略。闕所。

虧 盈の反對。物の減少し行くこと。損じ毀るゝこと。例 盈虧。

【かくる】

隱 隱匿 見又は顯の反對。あらはれぬことにも、あらはさぬことにもいふ。例 隱見。隱蔽。隱退。

匿 逃げかくるゝことにも、つゝみかくすことにもいふ。

竄 逃げまはりかくるる意。例 遁竄。

藏 物を收め蓄ふることにて、そは外より見えぬものなれば、かくす、かくる等の意に轉用す。例 祕藏。腹藏。寶藏。

【かくのごとし】

如此。如是。若此。若是。如斯。若斯。 是、此、斯の區別は、これ(是、此、斯)の區別に同じ、同條を見るべし。如と若とは、その意同一なり。

【かげ】

蔭陰影景 蔭影景 日かげ又は草木のかげの意。

陰 日かげの意。

影 日光に照されたる物の形の、他に映りたるをいふ。

景 日光の物にあたりて、反射せるをいふ。

【かける】

翺翔翥翰 鳥の羽をのばして舞ふこと。

翔　翔に同じ。

翥　飛びあがること、羽ばたきして飛ぶこと。

【かご】

籠　籠籃。

籃　大小通じて用ゐらる。物の脱け出でぬやうにせるもの。

大なるかごにて、小兒を入れ置くものなどの稱。例 搖籃。

【かさ】

笠　頭部に戴くかさにて、菅笠などの如く、炎天、雨、雪すべて用ゐるもの。

傘　手に持つ廣き傘にて、雨雪を防ぐもの。雨がさ、蝙蝠がさなどこれなり。

【かさぬ】

重　重疊、複累層（自動詞の時はカサナル　他動詞の時はカサヌ）

最も廣く用ゐる辭にて、一重のうへにも、幾重のうへにも用ゐる。例 千重萬重。九重。

複　單の反對にて、二重をいふ。例 重複、複雜。複數。

累　圓き物をかさぬること。又かさなること。例 危きこと累卵の如し。

層　だん〳〵にかさなりたる段のこと。例 層宮。一層。三層樓。

【かざる】

飾　飾文　うつくしく見すること。善きことにも、惡しきことにも用ゐる。例 粉飾。粧飾。修飾。

文　とりつくろふこと。例 小人の過は必ず文る。

【かしぐ】

爨　炊　爨炊　竈に火をたきて物を煮ること。

爨と同義なり。

【かすか】

幽　幽微　深處又は暗處にありて、明白に見分のつかぬこと。

微　杳　小くして、目にも見えぬほどの物をいふ。

杳　はるかともよむ。杳冥と熟する時は、かすかに、はるかにして、暗く判然せぬこと。

【かすむ】

掠　掠抄　人の物を暴力を以て奪取すること。例 奪掠。掠取。

抄　我物にする意。例州郡を抄略す。

【かぞふ】

計　事物の見つもりを立つること。即ち概數を見積りて、多小厚薄を考ふるをいふ。

算　十露盤に當てゝ見るといふ意。

數　物の數量をかぞふること。

【かたし】

堅　脆の反對。柔ならず、破れず、折れず、内部外部共にかたくして、確實なる意。例堅守。堅實。中堅。堅城。

固　破れ難く、崩れ難く、動し難く、外部のかたくつよきをいふ。例美なるかな山河の固め。固執。堅固。頑固。

牢　堅と固との中間の意を有す。内部までにもあらず、外部のみにもあらず。例牢乎として拔くべからず。堅牢。

硬　軟の反對。少しくかたきにも、甚だかたきにも用ゐらる。例硬骨。硬派。

【かたち】

形　多くは、動物以外の物のかたちをいふ。例方形。三角形。

容　多くは人のなりふりに用ゐる。擬人法としては、その以外にも用ゐることあり。山容などこれなり。例美容。好容。

貌　身體の一部分なる顏面のことの稱。例外貌。美貌。容貌。

狀　有樣といふ意。例人を擊つ狀をなす。近狀。狀態。

態　樣子からの意。例態度。癡態。狂態。

像　或者に類似せるかたちをいふ。例肖像。影像。

【かたはら】

傍　傍側。

側　附近、最寄などの意。例近傍。傍若無人。

【かたる】

語　そば、かたわきなどの意。傍よりはその意狹し。

語談　兩者互に、はなしあふこと。

話譚　咄語。壯語

例されば、まとまれる話にはあらず。例獨語。密語。

談　前後の纏まりたるはなしをすること。例美談。軍談。實歷談。叢談。談柄。談論。

話　筋道を立てゝ、人にはなして聞かすこと。例佳話。講話。說話。閑話。

譚　談に同じ。

【かつ】

勝　勝捷克戡

負の反對にて、大小の事に係はらず、廣く用ゐらる。例勝敗。戰勝。

捷　いくさにかつこと。例捷報。祝捷。

克　戰にかちて城邑などを取れることにて、捷よりは强し。例攻むれば必ず克つ。某邑に克つ。克己。

戡　戰にかつのみならず、平定せる意あり。

【かつて】

嘗　なむとも、こゝろむとも訓む。このかつては、一度にても、二度にても、度數にかゝはらず、汎くいふ辭にて、前かたから、かねぐ、つねに、などいふ意。例未嘗て聞かず。嘗て出遊す。

曾　「チヨットデモ」「一度モ」などの意。故に嘗は幾度の事にも用ゐらるれど、曾は狹く一度の意に用ゐらる。例曾て家を出でず。曾て京に遊ぶ。曾て知らず。

【かど】

角　角などいふ。

稜　そとがはのかどにて、三角、四角などいふ。

廉　かどばりたる事。かどだちたる事。

【かなしむ】

悲　悲哀。喜の反對にて、用法廣し。不憫に思ふ意あり。例悲痛。悲傷。悲觀。悲慘。悲劇。

哀　樂の反對。心に深くかなしむことにて、悲よりは强し。かなしむ聲なり。例哀音聞くに堪へず。哀子。哀悼。哀傷。哀憐。哀痛。

【かなふ】

稱　稱適協叶

よくつりあひて相應する意。例名實相稱ふ。腰のめぐり七尺長之に稱ふ。

適　よく相合ひて相當すること。例適當。適合。適宜。

協　心の和合すること。例協同一致。協力。協同。協議。

叶　協の古字にて、意同じ。

【かぬ】

兼　しわざの二つにわたること。例 兼帶。兼官。兼程。

攝該　かりにはからふ事。例 攝政。攝行。攝取。

該　すべくくる事、兼に備の意あり。例 萬物該兼。該當。（俗語、ソノハヅといふ意）該府。（俗語、其の事を、當職の意。さばくべき）

【かは】

川　水流の大小長短に關せず、すべて土地の窪める處を流れをる水の稱とす。例 大川。巨川。細川。小川。

河　支那北部の黃河の稱なりしが、北方諸流の黃河に入る諸川をも河といへり。故に用方狹し。例 銀河。河漢。河渠。

【かは】

皮　肉を包めるもの。

革　毛を去りて、清潔に造りたる皮。「ツクリガハ」と譯す。

韋　やはらかにしたる皮。なめしがは、をしかは、などといふに當る。

【かはる】

變　變化。常の反對。急にかはること。例 天變。地變。機變。應變。變詐。世變。時變。變轉。變色。

化　かはりきりたることにて、原質までかはるをいふ。故に變は一部分なれども、化は全體のかはることにて、その意強し。例 教化。文化。化石。德化。化育。

代　かはると、かふと自他通用す。代理の意。例 代言人。代書人。代議士。

替　物を取りかふる意。例 交替。隆替。爲替。

易　事物そのもののかはるにも、物と物とを取りかふるにも用ゐる。意義用法尤も廣し。例 改易。萬世不易。貿易。交易。

更　かはると、かふとの自他通用す。變改の義にも用ゐらる。夜間を初更二更など、分つも、かはる意なり。例 更改。更代。變更。紛更。

換　或物を先方に遣りて、其かはりに先方より他物を受取るをいふ。例 交換。換易。

渝　惡しく變ずることにて、盟を破り、約束を變改する意。例 渝盟。渝言。渝色。

【かふ】

飼畜牧豢

飼　畜　牧　豢

鳥獣に食餌を與へて養ふこと。例飼養。飼育。

チクの音の時は、たくはふる意となり。キク又ハキウの音の時は家に養ひかふ鳥獣の意となる。されば畜生はキクシヤウ又ハキウシヤウが正しけれど、今ハ習慣に從ひてチクといふ方穩なり。例畜養。畜生。飼畜。

牛、馬、羊、豚などを、野に放ちて、草を食はしめ養ふをいふ。轉じては治民のことにも用ゐる。例牧養。牧場。牧伯。牧民官。牧師。

獣類を檻中に入れて、養ひ置くこと。例豢養。

【かふ】買　沽

買ひて、あきなひをすること。例商買。賣買。

かふとも、うるとも訓む。買は、大買することなれど、沽は小買する意なり。例沽酒。

【かへつて】卻

卻(却)反

しりぞくとも訓む。退卻と連用する字なり。進んで勝たんと謀りながら、思ひの外に退卻して勝つことを得ざりしが如きを「勝たうと思ひて、かへつて負けた」といふ。(却)の字は卻の俗字なり。

【かへりみる】反　顧　省　眷

反對になること、ひっくりかへること。全く豫想と反すること。

顧省眷

ふりかへりて見ること。後方に心を置くこと。例愛顧。恩顧。顧望。顧盼。顧問。顧念。眷顧。

見まはること。又我心につくづくと思考するにもいふ。例省察。省視。反省。自省。三省。歸省。

目をかけて愛する意。例眷顧。眷戀。眷々。

【かへる】歸　還　返　反　復

歸還返反復

かへり落著く意。例歸朝。歸宅。歸順。歸納。歸嫁。歸依。歸省。

往の反對。來りし道を立ちかへる意。例師を還す。債を還す。還俗。還魂香。

往きて復取つてかへすをいふ。還に似て強し。例反照。反省。反動。反問。反駁。

廣く普通にかへる事には、いづれにも通じて用ゐる。

今來りし道をその儘返るをいふ。再度の意を含む。例復活。復籍。回復。復答。

廻　本復。急に方向を變じて、引きもどし來るをいふ。又まはり道をしてかへるにもいふ。例 迂廻。

【かまびすし】

喧　喧噪。喧嘩。喧傳。

嘩　大聲にて競ひしやべること。例 喧嘩。

囂　口々にしやべりたつること。例 喧嘩。

聒　大勢聲をあげて、やかましく騷ぐこと。「カマビスシ」と訓む。

聒　耳の遠くなるまで、がやがやとやかましきこと。例 喧聒。

【かみ】

神　天のかみなり。又陽に屬するかみなり。例 天神。

祇　地のかみなり。又陰に屬するかみなり。例 地祇。

【かむ】

咬　咬ひつくこと。

噬　かみきりて食ふこと。

嚙　がぢぐとかむこと。

咀　口中に含み居て味ふこと。

嚼　ニチヤ〳〵と音をたてゝかむ意。

【かんがふ】

考　考稽　案　勘　校

考　道理を思ひはかること。例 考案。熟考。考査。考古。

稽　兩者を比較して、かんがふること。深く注意する意あり。例 稽古。荒誕無稽。

案　思案すること。胸に手を當てゝ熟考すること。例 考案。新案。案出。好案。

勘　反覆考定の意にて、くりかへし吟味すること。例 勘定。勘當。勘考。

校　引較べ見較べて考ふること。例 校合。校正。

【からし】

辛　辛　鹹　芥子、蕃椒、山葵などの、烈しく舌を刺すが如く辛きこと。それより、むごく、つらきことに轉用す。例 辛苦。辛酸。辛き目。辛辣。

鹹　海水の鹽がらきをいふ。

【かり】

田獵　狩

田　四季鳥獣をとるかりの總稱。

獵　田に同じ。されど、獵は大なるかりに、田は小なるかりに用ゐる。

狩　冬のかりをいふ。冬はかりをするに、尤もよき故に、廣く此字を用ゐる。

【かる】

枯　枯稿。

稿　榮の反對。草木の死すること。例枯死。枯木。枯骨。

嗄　草木の枯死して、乾燥せるをいふ。例形容枯稿。

涸　聲のしわがるゝこと。

渠　池沼川湖等の水の、無くなること。

【かる】

刈　草をかる事。

芟　刈に同じ。

【かれ】

彼　此の反對。「カレ」とも「カノ」とも訓む。

渠　詎の字とも通用す。あの人といふ意。俗語に專ら人を指す辭とす。

【かわく】

乾　濕の反對。しめりげの無くなること、又かわかすことにも用ゐる。例乾燥。

燥　潤の反對。火熱のためにかわくこと。例高燥。

渴　喉に潤ひのなくなることにも、水のほしくなれることにも用ゐる。例渴しても盜泉の水を飲まず。飢渴。

きの部

【きく】

聽　自分より注意してきく意。例講義を聽く。政を聽く。謹聽。傾聽。靜聽。聽衆。傍聽。

聞　先方の聲の耳に入ること。又は、おのづから、きこゆるをもいふ。例聲天に聞ゆ。令聞。新聞。名聞。聲聞。

【きざし】

萠　草木の萠芽の意。轉じて事物の發端の稱とす。

兆　事物の發生せんとする前觸の「シルシ」にて、萠よりも以前に屬す。

【きざむ】刻　ほりきざむこと。

彫　刻と同義なり。

【きし】岸　水ぎはの高き處。

涯　水際なり。水のゆきとまりたる處なり。例 津涯。

【きしる】軋　車と車との齒の嚙み合ふこと。それより相爭ふことに轉用す。

轢　車が他物の上に廻りて、其齒の當る意。其より爭ひて他を凌ぐ事に轉用す。例 軋轢。凌轢。

【きず】疵　創　傷　瑕　瘢　疵創の如ききずをいふ。例 小疵。疵瑕。切りきずをいふ。例 創傷。

傷　瑕　「デオヒ」、「ケガ」等の意にて、且創の意をも含めり。例 負傷。物品の、毀損し、裂けなどせる意。又、人物の容貌、性質行狀などの、批難あるにいふ。例 白玉の微瑕。瑕瑾。

瘢　俗にいふ「ナマキズ」の意。例 刀瘢。瘢痕。

【きぬ】衣　著物の總名。例 著衣。

絹　蠶の繭より、絲を延きてとれるもの。例 絹絲。絹布。

帛　絹絲にて織れる織物をいふ。故に布帛といへば、木綿と絹織との事。絹帛といへば、絹絲の織物をいふ。

【きはむ】窮　究　窮究極谷

「行キヅメ」、「行キツマル」等の意。窮理といへば、道理の此以上はなき所まで達せるをいひ、困窮といへば、困難の最極點をいふ。例 窮達。窮迫。事物の理を推して、終りまで尋ね至り、詮じつむるをいふ。例 研究。學究。究竟。

極谷　至端至極の意にて、至り屆きてその先なきをいふ。例 極端。極力。至極。究極。身動きのならぬこと。例 進退維谷る。

【きびし】

嚴　嚴重。威嚴。嚴父。寛ならざる意。

緊　緊急。緊要。緊切。緩みなき意。

【きゆ】

消　消滅。熄滅。湮（自動詞の時はキユ、他動詞の時はケス）きえて、無くなること、廣く用ゐらる。例 消亡。消火。霧消散す。日を消す。暑を消す。

滅　火のきゆること。それより物の見えずなることに用ゐる。

熄　火のきゆること。例 熄滅。

湮　薄くなりて、形の定かならぬこと。例 煙滅。

【きよし】

清　清淨潔。濁の反對にて、水の澄むこと、轉して「サワヤカ」なるにも用ゐる。例 清風。清涼。清澄。

淨　穢の反對にて、綺麗なること。例 淨土。清淨。汚の反對にて、甚清きこと。例 高潔。潔白。純潔。

潔

【きる】

著　著衣。身體につくるものは、何にてもいふ。

被　被服。身體の周圍を包むこと。例 被服。被害。衣服を著用するに限りていふ。

衣　衣に同じ意。

服

斬　斬首。斬殺。斬馬劍。人馬等を斬る意より。すべての物をきるにいふ。例 斬首。斬殺。斬馬劍。

斫　斫營。乃斫大樹、白而書之。史記。きり落す意。又斬の意にも用ゐる。例 夜斫營。乃斫大樹、白而書之。史記。

切　切斷。刀にて細にきり刻む意。例 之を切りて鱠となす。切斷。

翦　翦刀。「ハサミ、キル」の意。翦の正字なり。例 爪を翦る。翦刀。

截　截斷。「ズタ〳〵ニ、キル」の意。例 截斷。

伐　伐木丁々。「タヽキ、キル」の意にて、木をきるに用ゐる。例 伐木丁々。

裁　衣類を斷ち切るにいふ。轉じては、正理によりて判斷するにもいふ。例裁定。裁判。裁縫。

くの部

【くさる】

朽　腐

朽　草木などの脆くぼろくになれるをいふ。例朽木。朽索。

腐　肉類果實などのくさりて、食ふべからざるをいふ。例腐敗。腐心。腐儒。

【くだく】

碎　摧

碎　細かく、くだきやぶること。例破碎。零碎の文字。

摧　ひしぎくだくこと。例破摧。摧折す。

【くだる】

下　降

下　上に對する語。眞直ぐに下の方へくだる意。轉じて誹遜の意に用ゐる。例垂下。直下。卑下。

降　登に對する語。坂路の如きを斜にくだる意。下よりはその意弱し。例階を降る。降伏。

【くつ】

靴　履　履

靴　元來軍陣用のものに限るなれど、今は常用のものに用ゐる。

履　皮ぐつなり。

履　ひとへのくつなり。

【くつがへる】

顚　覆

顚　上より下へ眞直ぐに殞つることにも、下方の者の却りて上方になるにもいふ。例顚仆。顚殞。顚覆。顚倒。顚下。顚墜。

覆　上方の者が下になり。下方の者が上になりて倒るゝをいふ。例覆倒。覆沒。覆滅。覆轍。覆軍。覆盆の雨。覆車。

【くづる】

崩　壞　頽

崩　自他共に通用す。山岳、巖、岸などの大なる者のくづれ落つること。例土崩。崩御。崩壞。

壞　自他通用す。物の少しづゝ破れくづるゝをいふ。例破壞。壞廢。

頽　基礎の破れて墜下するをいふ。例 百事廢頽。人情衰頽。風俗頽敗。頽齡。

【くに】

邦國州　は幾個の國を含有する大なる者にて、日本の邦の伊豆國などいふべきを、正しとす。されども今日は邦と國と區別なく混用す。清國、英國、露國などいふよりは、清邦、英邦、露邦、などいふを正しとすれど、今はその區別を失へり。

州　國土の方角を分ちたる大別の稱にて、九州、四大州、五大州、などいふこれなり。信州、野州、武州、長州などいふはかなはず。

【くはし】

精　よく搗きて、しらげたる米をいふ。されば、よく吟味し念を入るゝこと。例 精選。精進。精細。精白。精確。

委　水流の曲りくねりたるをいふ。それより轉じて事件の複雜せる處まで、殘るくまなく、くはしくするをいふ。例 委曲。委細。委員。

【くむ】

汲　海水にても、井水にても、水を汲みあぐること。用法廣し。

酌　酒を盃にくむこと。例 滿酌。飲酌。酌量。

斟　うめあはす意にて、過不足なきやうに折衷すること。

【くばる】

賦　わり當つること。賦稅などいふ。

配　くばる、あはすなど訓む。配合の義にて相當に割り當つること。

【くびる】

絞　頸をしめくゝること。例 絞首臺。

縊　くびをくゝること。例 縊死。

經　くびをくゝること。例 自經。

【くもる】

陰　日かげのうすくなること。

曇　玉篇に黑雲の貌とありて、空のくらくなること。

【くら】

府庫倉廩藏

府庫倉廩藏　貨財寶物を藏する所。兵器、車輛などの道具を入れ置く所。五穀を入るゝ所。但し未だ刈りたるまゝのもの。五穀の既に籾などを去りて食ふべきやうになしたるものををさむる所。總べて物を收めおく所にて、用法廣し。

【くらし】

暗　暗闇。昏味。晦明の反對。日月燈火のくらきにも、道理にくらきにも、精神のくらきにも、通じて用ゐる。例 暗愚。暗夜。音義共に暗に同じ。

闇　暗に同じ。

昏　昏暮と連用して、太陽西山に入り、暮色四山を罩むる頃をいふ。精神のにくらき意にも用ゐる。例 昏黑。昏昧。黃昏。昏冥。昏迷。薄暗く分明ならざる意。例 愚昧。暗昧。昏昧。朦昧。眞暗の意。多くは、人目を避け、才能をくらましかくす意に用ゐる。例 韜晦。晦暗。晦澁。晦迷。

昧

晦

【くらふ】

食　食喫餐啖。物をくふ意。その意廣し。例 飲食。美食。酒食。食言。

喫　口中に入れて物をくふこと。例 喫飯。喫茶。喫酒。喫煙。喫棒。

餐　煮て熟せる食物をいふ。くらふと訓む時は共儘食ふ意。例 餐飯。加餐。

啖　嚙み碎いて食ふこと。例 健啖。

【くらぶ】

比　比競。二物を合せ見て、其差違を知ること。例 比較。比例。比況。

競　きそひ、くらべて、物の勝敗、優劣をみること。例 競馬。競走。競爭。

【くるしむ】

苦　苦困窘。「二ガシ」とよむ字。なやむ意。例 辛苦。苦心。苦勞。難苦。苦樂。

困　難儀をして、なやむこと。例 困窮。貧困。困難。

窘　たしなめ、こまらす意。例 窘窮。窘束。窘迫。

【くれ】

晩　晩暮。日の入りかゝれる時。

暮　日の入り果てたる時。

昏　日の入り果てゝ、既に暗くなりたる時。

【くろし】

黑　墨の色の如く、くろきこと。

緇　緇衣と連用する時は、袈裟の色のくろきこと。

涅　黑き泥土の色をいふ。例 涅齒。

黧　煤の色の如く、くろきこと。例 黧黑。黧牛。

玄　六入を玄と云ふとて、赤き色よりだん〳〵に、六入染めたる色合のことなり。故に黑色の中に赤き色を帶びたる者。例 玄米。玄端。玄黃。

けの部

【けがす】

汚　穢濆（自動詞の時はケガル、他動詞の時はケガス）不潔なる水にて、濁水の流れざるをいふ。轉じては、惡風、德惡のことにもいふ。「汙」の字と同じ。例 汚穢。汚水。汚濁。汚名。汚行。

穢　田畑の中に雜草生じて、きたなきをいふ。汚よりは更に重し。例 穢土。穢德。穢濆。穢行。觸穢。穢多。

濆　懇意に任せ、又は懇意の者のやうにもてなして、無禮にわたること。言語行爲の上に、敬意、禮容を失するをいふ。例 尊嚴を冒濆す。褻濆。

【けずる】

削　削刊宛。

刪　刪刊宛。

刊　とりのぞくこと。例 添刪。筆すべきは則ち筆し、刪るべきは則ち削る。爲更ふること。例 律令を刪り定む。きりとること。刊と書くも意は同じ。但し、刊は音セン。例 山に隨ひて木を刊る。改刊。追刊。發刊。

宛　ゑぐりとること。例 心頭の肉を宛卻す。

【けはし】

險　險嶮。阻峻。峭。山のいは、かどだちて、はげしきこと。例 王侯險を設けて其國を守る。險と同字。

嶮　險と同字。

阻　險阻と連用す。阻隔して、通路なく、行き難き意。

峻　山のきりたてたるやうに、急にして、けはしきこと。

峭　峻に同じ。

【ける】

蹴　蹴蹶。

けちらす意にも、けあぐる意にも用ゐる。例 一蹴して至る。蹴鞠。

蹶　けたふす意。例 足を以て石を蹶る。秦六國を蹶る。

この部

【こ】

子　子兒。

彼は何某の子と、父母に對していふ時。又、孔子、老子、孟子、の如く人の敬稱にも、植物のたねにも用ゐる。

兒　こどものことにいふ。

【こころみる】

試　試驗。

其の實を知らんがために、ためすこと。例 試筆。試問。

驗　試みたる上の效力をいふ。例 經驗。效驗。試驗。

【こたふ】

答　答對。問の反對。返事をすること。言語にても、書簡にても同じ。例 答案、口答。筆答。速答。答辯。

對　人の問に對し、通理を明にして返事をすること。又尊長の人にこたふる時用ゐる。故に答よりは重し。例 對策。應對。

應　問に對して、同意と否とに係らず、簡單に返事をすること。例 應接。應答。應問。

【こごごとく】

悉　悉皆。詳悉。

盡　一つ宛數へて、少しも殘さぬをいふ。例 或群集を、一まとめにして、殘らずの意。

畢　「ヲハル」とも訓む。爲し終る意。又、漏れ殘ることなき意。

【ごごし】

如　如若。猶似。

如と若とは意殆ど相同じ。如は其通りと譯し、若は其樣なと譯す。若は如よりも其意緩し。

若　如の條を見よ。

猶　譬へて云はゞの意にて、彼を假りて、此を明す辭なり。例 兄弟猶此箭也。

似　如、若と同樣に用ゐる。

【ことに】

殊　特異。別にして、事に區別あるをいふ。別段にの意。卽ちかけ離るゝこと。例 殊死。殊遇。殊功。殊勳。殊異。

特　取分けの意。多くの物の中より、一つを取出す意

異　同の反對。彼と此と同じからざるをいふ。例 異姓。異日。異域。異聞。

【このむ】

好　好喜。惡憎の反對。心にすくことなり。

喜　歡喜の意にて、よろこびすくこと。

【こひねがふ】

願　庶幾。希幾。「チカシ」とも訓む。願ふ意なり。

庶　願に同じ。

希　願と通用す。「マレ」ともよみて、めづらしがりて願ふ意。

願と同義なり。

【こふ】

請　請願。乞。丐。先方の樣子を伺ひ問ひて所望する意。又、ねがはくは、どうぞなどの意ともなる。例 請問。懇請。請願。申請。起請。

乞　我身の利害を主として、切にこひ求むる意。例 乞食。骸骨を乞ふ。身を乞ふ。斧正を乞ふ。

丐　物を所望すること。乞より其意輕し。例 乞丐。丐婦。

【こぼす】

溢　水のこぼれいづること。例 溢出。溢美。

零　涙或は露などの落ち散ること。例 零露漠々。零落。零丁。

【こぼつ】

毀　毀壞。少しく物の缺けたるにも。悲み瘦するにもいふ。例 破毀。毀損。毀傷。

墮　墮。うちこはして取拂ふこと。

【こぼり】

冰　凍。

冰　水の寒さのために凝結せるもの。例 冰解。冰釋。結冰。

凍　寒さにこゞゆること。例 凍死。凍餒。

【こまやかに】

密　疎の反對。間のすかぬこと。例 密接。

濃　淡の反對。例 濃厚。濃綠。

緻　きぬの目のつまりたること。密の義に用ゐる。

縝　緻と同義なり。例 縝密。

【こゆ】

越　越。超。踰。

超　踏みこえてゆく意。例 山を越ゆ。偕越。越權。越卓。

踰　飛びこゆ、躍りこゆ等の意。例 泰山を挾みて、北海を超ゆ。超然として高舉す。超絶。超群。超越。超過。超乘。ひと跨ぎにこゆるにて、越に似たり。例 牆を踰ゆ。月を踰ゆ。

【これ】

是　是此之斯維惟諸旃

是此之斯維惟諸旃

是　非に對する語。心に是非を判斷し、道理に對して用ゐる字。例 此の因あれば、是の果あり。是以。於是。

此　彼に對する語。場所又は、物體を指示す。又文章中に在りては、上述の事件を總括していふに用ゐる。例 此日。此宿。此の如し。……此を以て我其の然る所以を知る。

之　此、是と同樣に用ゐられども、その意共に輕し。上述の事を承けていふにも、下の事を指していふにも用ゐらる。例 之に從つて之を見れば……。博愛を之れ仁といふ。

斯　この筋合（道理）といふ意にて、此、是よりは、その意甚重し。例 斯の人にして、斯の病あり。斯文。斯道。

維　文句の初めに用ゐ、人の注意を惹起するに用ゐる。例 維時明治……

惟　維に同じ。

諸　「コレヲ」と讀む。之乎二字の合字なれば、この二字を用ゐるべき所に使用す。例 山川其舍諸。歸諸京師。

旃　文句の末を結ぶ時に用ゐる。之焉兩字の合字なり。

【ころ】

頃比。

頃　「ヨリ」(節)の意。例頃日。頃者。

比　「コロホヒ」とも訓む。過去より連續して、現時までに及べる意にも、亦未來に及ぶことにも用ゐらる。

【ころす】

殺　生物の命を絶つことには、總べて用ゐらる。

誅　罪惡を數へ責めて殺すをいふ。

戮　罪惡を數ふるのみならず、懲惡のために殺すこと。

弑　人の臣子たるものの、おのが君父を殺すこと。

死　他殺にあらずして、自然に死ぬるやうにすること。

さの部

【さいはひ】

幸　幸福。祐祉祥禎倖。案外なる仕合せをいふ。例幸運。

福　禍の反對。仕合せのよきこと。又、果報のよきこと。例天道は善に福す。

祐　神明の加護をうくる幸。例君子萬年天の祐を受く。

祉　吉事なること。

祥　吉兆なり。例善を作せば、天之に百祥を降す。

禎　吉兆なり。例國家將に興らんとすれば。必ず禎祥あり。

倖　僥倖と連用して「コボレサイハヒ」と譯す。例聖主は倖を徼めず。

【さかひ】

界　彼と此との間の「シキリ」をいふ。

境　界の內部をいふ。即ち「シキリ」より內がはなり。例境內。國境。

疆　土手を設けたる界をいふ。例封疆。

【さかづき】

杯　杯。盃。觴。舟。盞。木を曲げて造りたる物、又は、磁器製の物をもいふ。

盃　杯の俗字なり。

觴　角にてつくりたる杯の小なる物をいふ。

觴　蓋

【さかふ】

逆　忤

【さかり】

隆　盛　熾　昌　壯

【さき】

先　往　前　曩　嚮　向

【さく】

割　裂　剖　劈　析

【さぐる】

探　搜　摸

觴の大なる物をいふ。

杯の小なるものにて、猪口の類をいふ。

逆　忤

順の反對。不順にしてさからひ、もとる意。例逆賊。逆意。大逆。

心にさかひ、もとる意。

隆　盛　熾　昌　壯

替の反對。次第に高くなる意。例隆起。興隆。

衰の反對。次第に大きくなる意。又、さかり最中。極度等の意あり。例盛大。盛世。盛會。盛況。盛宴。旺盛。盛怒。

火の烈しく燃えあがること。それより轉じて威勢のさかんなるをいふ。例熾盛。昌熾。

漸次開明なる意。又漸次多くなる意。例繁昌。昌平。

強大の意にて、氣力さかんなるをいふ。例壯健。雄壯。壯年。壯夫。壯語。

先　往　前　曩　嚮　向

物の順序、時の區別、過去のことにも用ゐる。例先陣。先哲。先鞭。先聖。先天。

的。先日。先般。先月。先人。

過去の事にいふ。例往古。往事。往昔。

時の上にも、順序の上にも用ゐる。例前世。前日。前途。前進。面前。目前。

過去となりて久しきをいふ。例曩日。曩者。

過去となりて稍や久しきをいふ。

嚮に同じ。

割　裂　剖　劈　析

割裂剖劈析

刀にてさく。又、刀を横にして切り分くる意。例割讓。割腹。割據。分割。

布帛をさく意より、廣く用ゐらる。例裂帛。支離滅裂。四分五裂。

「タテワル」。切り開く等の意。例腹を剖く。解剖學。剖判。

「ツンザク」。刀物にて頭よりうちわる等に用ゐる。例劈頭。斧劈。

木をさく意。又、明かにする意。例分析。明析。

探　搜　摸

探搜摸

探　窺ひさぐる意。例探偵。探索。探險。

搜　有りしものの見えずなれるを、さぐりもとむる意。例搜索。

摸　手にてさぐる意。例暗中に摸索す。摸稜。摸はさぐる時には音バクなり。今習慣によりてモと訓めり。

【さけぶ】

號　號泣。號哭。

叫　大聲にてさけぶこと號に同じ。人にも禽獸にも廣く用ゐる。

【ささぐ】

捧　捧擎。

擎　兩手を高くさしあげて、物をうくること。

【さしはさむ】

挾　挾高くさしあげてもつこと。

夾　挾夾。

插　腋にかゝゆること。それより或事物を賴みにする意に用ゐる。例泰山を挾みて北海を踰ゆ。挾書。長を挾む。貴を挾む。音義共に挾に同じ。但し、左右より持する意あり。例夾輔。

【さす】

刺　刺插。さし込む意。例插秧。插註。插花。插頭。

螫　とげのたつこと。芒刺背に在り。

毒蟲のさすこと。

【さとし】

聰　聰螫。

敏　聰敏。耳のよくきこゆることにて、「サトキ」をいふ。例聰明。

慧　敏慧。鈍の反對。心の「スバヤキ」の意。例敏捷。穎敏。行に敏なり。機敏。細智のかしこき意。例小慧。慧敏。

【さとる】

覺　覺悟。覺知。覺悟。覺醒。

悟　悟了。眠りのさめたる如く、知らぬことを、明かにさとる意。例覺知。覺悟。覺醒。

曉　曉了。自己の心の迷のひらくる事。例悟入。大悟。了悟。頓悟。

喻　喻曉。「アカツキ」とも訓みて、夜明のことなれば、轉じて、暗かりしものゝ、明くなり來るをいふ。例通曉。心によく合點する意。「サトス」と他動にも用ゐる。例君子は義に喻る。

【さむ】

了　分明にさとる意。例了解。了悟。

覺　眠のさむること。例長夜の眠りを覺破す。

寤　月の半さむるをいふ。例寤寐。

醒　酒の酔のさむること。例衆人皆酔へり、我獨醒めたり。

【さらす】

晒　麻布、綿布などの色を白くせんため、洗ひて日にあつること。轉じて衆人の目に觸るゝやうにすること。例布を晒す。恥を晒す。

曝　物を屋外に露出しおきて、風雨にまかせおくこと。曝は元來暴の俗字なり。

【さる】

去　來の反對。其場所を立退くこと。例退去。死去。去就。

距　里程又は年月の相隔るにいふ。例距離。今を距ること十年。

違　行違ひ離るゝこと。例忠恕は道を違ること遠からず。

【さわぐ】

騷　急にさわぎ亂るゝこと。例騷動。騷擾。騷然。

譟　やかましく、わめきさわぐ意。例喧譟。鬧譟。

噪　鳥蟲などの聲々に群りなくこと。例蛙鳴蟬噪。

躁　急に動きさわぎて、落付かぬこと。例躁急。輕躁。

【さを】

竿　竹の幹の枝葉を去れるもの。例百尺竿頭。日高きこと三竿。

棹　水底を突きて、舟を動すさを。例棹歌。

篙　棹に同じ。

衡　權のさをのこと。例權衡。

しの部

【しかり】

然　然爾

「サウデヤ」と先方の言を許諾する意。例然諾。當然。

爾　「カウデヤ」といふ意。何々に對する我考へは爾り、の如く、上述の事件に對

し、自己の考に重きを置きていふ語。

【しかる】

叱　叱咤。

訶　聲を勵ましていふこと。例叱咤。責むることにて、叱よりは輕し。例呵責。

【しきりに】

頻　事の繁くつゞくこと。たびく、おひかけく、などの意。例頻繁。頻々。

連　引きつゞきて、きれざること。例連戰連勝。連年。連夜。

荐　いやがうへに重りつゞくこと。例災害荐に至る。

累　たゝみかくることにて、連に似て急速なる意。例累遷して大將に至る。

切　「ヒタト」の意。例切迫。切思。的切。切實。

【しく】

布　物を地に敷くこと。それより他の意に轉用す。例教を布く。政を布く。枝葉布く。流布。布令。布の意に同じ。

敷　布の意に同じ。

席　「ムシロ」とも訓みて、下じきにすること。易に席以白茅と見ゆ。

藉　草を下に敷きて下じきとすること、席の意に同じ。例狼藉。

鋪　門扇の金具に、金を延べてつけたる者をいふ。それより、蒲團、席などをしくことにも用ゐる。

及　「シク」と訓む。走るものに、後より追ひつくこと。

如　及ぶこと。不如といふ時は、及ばぬことなり。

若　其義如に同じ。

【しげし】

繁　繁茂、稠蕃滋。

茂　物の多くありて、文采の雜入せる意。例繁文褥禮。繁雜。繁茂。繁簡。

稠　一つの草、又は一つの木等の敷げる意。多數の意はなし。例茂林。茂生。茂才。

蕃　草の敷げく生へたること。轉じては、多數の者の、隙間のなきにいふ。例稠人廣坐。人家稠密。草の茂りて、多くなること。轉じて物の殖ゆることに用ゐる。例蕃殖。子孫必

ず蓊からん。

滋 水の浸染して、漸次に廣くなる意より、轉じて其數の多くなることに用ゐる。例 綠苔滋し、景色滋し。

【したがふ】

從 順隨循遵卒

順 從事。逆の反對。物事にさからはず、そひてゆく意。例 順風。順逆。順良。柔順。和順。順序。孝順。耳順。

隨 先方の意見の通りにしたがひて何事をもすること。又、あとについて行くこと。例 隨行。隨從。隨意。隨筆。隨伴。隨分。隨處。

循 牆、塀又は道などの動かぬ物に沿ひて行くこと。それより無形なる一定不變の眞理にしたがふことにもいふ。例 法度に循ふ。天命に循ふ。天理に循ふ。

遵 或事を法則として、その通りにすること。又、心に尊みしたがふ意あり。例 遵奉。遵守。遵依。遵に同じ。

卒 親に同じ。

【したしむ】

親 疎の反對。例 親近。懇親。親の意に、私の意を兼ぬ。故に婢妾又は嬖臣を近づくることに用ゐる。例 親昵其義昵に同じ。例 私暱。

昵 慕欽

暱 慕欽に同じ。例 私暱。

【したふ】

慕 なつかしくて、離るゝに忍びぬ意。例 思慕。景慕。愛慕。心に尊敬してしたふこと。例 欽慕。欽仰。

欽 心に尊敬してしたふこと。

【しづか】

靜 動、躁の反對にて、動かず、騷がしからぬこと。例 靜穩。靜止。靜肅。靜寧。沈靜。靜坐。動靜。

閑 忙の反對。する事なく、ひまなること。例 閑職。閑散。閑雲野鶴。閑談。閑話。閑日月。閑人の閑事業。閑地。閑暇。

徐　疾の反對。言語動作等の急速ならぬこと。卽ち緩やかに、しづかなる貌。例除行。徐々。徐歩。

謐　靜寧なる上に、音聲なき意を兼ぬ。例靜謐。

寂　喧の反對。物音の全く止むをいふ。それより靜の極をいふ。例寂寞。寂寥。寂然。寂閴。

寥　寂に同じ。

閴　寂に同じ。

寞　寂に同じ。

【しづむ】

沈　沈淪　沔　浮の反對。物の水中にかくるゝこと。それより人事其他にも用ゐる。例晉陽を圍みて之を水す、城の沈まざる者三板。日沈む。月沈む。夕陽沈む。陸沈。深沈。世と浮沈す。

淪　其義沈に同じ。沈淪と連用す。例隱淪。淪喪。

沔　酒びたしとなること、行の亂れたる人に用ゐらる。例沈沔して色を冒り、敢へて暴虐を行ふ。

【しぬ】

死　死崩　薨　死に對して、貴賤の別なく通じて用ゐる。例死活。死別。死亡。戰死。

崩　天子の死をいふ。例崩御。

薨　天子に次ぐ貴人の死をいふ。皇族及び三位以上の人の死を稱す。例薨去。

卒　人臣にて、五位以上の人の死の稱。

歿　人の死して、世に在らざる稱。

夭　年若くして死するをいふ。例夭死。夭折。

【しばしば】

數　數屢　亟　時々うるさく迫る意。たび〳〵せきたつること。

屢　引續きしきりにの意。

亟　方法を換へて促す意。

驟　少しづゝ、時々する意。

【しばらく】

暫　姑　須臾　頃刻　暫時。

暫　程經ぬ間のことにて、暫時と熟し、時の上についていふ。一時間のことにも一時間のことにも、二日三日、二月三月のことにも、場合によりて用ゐらる。

姑　事件の上についていふことにて「マア、マア、マア、チヨツト」の意。例 姑之を舍け。姑息。

須臾　少時間のうちをいふ。

頃刻　須臾に同じ。

【しふ】

強、誣、罔

強　勢力を以て、無理に押付くること。

誣　是を非の如く、無實を實の如く、言ひ曲ぐるをいふ。

罔　無理にこぢつくること。論語に、君子可欺、不可罔也、とあるが如し。

【しぼむ】

凋、萎

凋　形容のしぼむことのみならず、半傷るゝ意。例 凋落。

萎　形のしなびたること。例 萎靡振はず。

【しむ】

使、令、敎、俾、遣

使　使役と連用する字にて、我より彼に、或事をせさする事。例 民可使由之。使上知之。

令　命令と連用する字にて。使に似たれど、意重し。例 令天下昭然知之。

敎　我より敎へて、人に爲さしむる意。例 進則敎良民爲姦退則令善人有禍。

俾　使に似て、其意輕し。例 俾予從欲以治。

遣　送也、縦也の義なれば、彼に任せて拘束せざる意。例 齊王遣使求臣女弟。戰國策。遣張良往立信爲齊王。淮陰侯傳。

【しりぞく】

退、卻(却)、斥、屛、擯、黜

退　進の反對。後へ引去ること。例 退步。退卻、退軍。退去。退席。撤退。辭退。退職。

郤　却と書くは俗字なり。後退して避くる意は退に同じ。又、受附けぬ意。例 且つ戰ひ且つ卻く。之を卻けて不恭となす。

斥　惡みて手強く除去する意。例 小人を斥く。惡黨を斥く。排斥。擯斥。

屛　斥に似て緩し。例 屛居。屛息。人を屛けて與に語る。

擯　他を輕蔑し、又は反對して逐拂ふこと。

黜

【しる】

知　官位を下げらるゝこと。例 黜罰・黜陟・貶黜。

識　知識　深く事の眞相、物の本性をしること。例 知己・知音・知友・知命・某公の知を受く。

事物の外部を見覺ゆることにて、知よりはその意淺し。例 學識・面識・認識。

知識。

徵

【しるし】

徵　證　効　驗

徵證　物事の引合せになるしるし。例 徵證・徵候。

「アカシ」とも訓む。證據となるもの。例 證書・引證・考證。

物事のきゝめのあるをいふ。多くは無形の者の結果をいふ。例 効果・効力・効驗。

藥力、祈禱、預言などのきゝめあるをいふ。

【しるす】

記　記紀識錄誌題署勒

記紀識錄　誌題署勒　書きしるすこと。又しるすこと。紀もしるす意は記に同じけれども、記は心に

存して忘れぬこと。故に記念と書くべきを、紀念と書くは誤なり。例 記念・記載・記憶・記述・筆記。

記の條を見よ。例 紀行文。

文章を書きしるすこと。

書きうつす意。例 記錄・日錄・手錄・語錄・筆錄・目錄。

書き記す意。例 日誌。

目につくやうに書きしるすこと。例 題辭・題詠・題額。

書檢也と註す。書籍の見出しのことなるが、それより轉じて、念を入れて書きつくることに用ゐる。

きりつけ、又はほりつけおくこと。例 物工の名を勒す。

【しろ】

城　堡

城　土を築き、塹を掘り、壘を積みあげて、造りたるもの。例 都城・宮城・城址・城寨。

「シロ」と訓ず。かきあげじろとて小城のこと也。例 營堡・城堡。

【しろし】

白　白素皓皚皎

黒の反對。廣くしろきものの總稱とす。轉じて明かなる意にも、曇なく潔き意にも用ゐらる。例白日。明白。白雪。白晝。潔白。白玉。

素　染めざる絹にて、本質のまゝなるをいふ。それより、ものの飾りなきにも、修行を加へぬにもいふ。例素練。素人。素面。素朴。

皓　白色の光澤あるをいふ。白よりもその意狹し。月雪などの形容に用ゐる。例皓月。皓々たる雪。皓齒。

皚　白色の形容辭。例白皚々。

皎　皚の意に同じ。例月出でゝ皎たり。

すの部

【ず】

不　不然也と註す。俗に「ヂイ」といふに當る。未來にかかる時は「ジ」と訓みて「マイ」といふ意となる。例梁惠王不果所言。城久不拔。

弗　不と同じ意なれど、其意重し。公追齊人至嚮弗及と春秋にありて、公羊傳の註に、弗者不之深者也と見ゆ。

【すがま】

鬱　鑄　すきまと訓む。「ヒビ、ワレメ」の事なり。それより人事のうへにも轉用す。左傳に人無鬱、則妖不自作とあるが如きをいふ。

【すぐ】

過　「スギマ」とも「ヒマ」とも訓む。穴のあきたること。鑄隙と連用す。

邁　過絶　經過の義。又轉用して、輕く助語の如くに用ゐることあり。例已に讀過す。已に看過す。

邁　進み行くこと。それより英氣の進みて、かへらぬにも用ゐる。例邁進。邁過。

絶　豪邁。英邁。

【すくなし】

水を横ぎりて渉ること。故に、過の意に用ゐることあり。又たちこゆる意に用ゐる時は、類を離るゝ意あり。例絶海の樓船。絶妙の好辭。精力絶倫。

少　寡　鮮　尠

多の反對。數量の多からぬ意。例少量。僅少。些少。

少寡 衆の反對にて、人數の少きをいひ、又、多の反對にて、量の多からぬをいふ。例寡兵。寡德。寡人。寡欲。寡聞。

鮮 甚だ少きをいふ。例鮮少。

尠 鮮に同じ。尠は元來尠の俗字なり。尠は音「セン」「スクナシ」「スコシ」と訓む。

【すくふ】

救 助け護る意。例救助。救護。救恤。救世。

拯 引き出し、すくふ意。例民を水火の中より拯ふ。溺れるを拯ふ。

濟 渡りかぬるものを、すくひ渡す意。例濟世。濟度。

【すぐる】

勝 勝尤。

尤 勝に同じ。例尤物。

俊 千人にすぐれたること。例英俊。俊秀。俊傑。

豪 飛び離れてすぐれたること。例優勝。

傑 衆にたちこゆること。例豪傑。英傑。

かつ、まさる、とも訓む。てづよく、すぐれたる事。例豪傑の士。雄豪。豪族。

【すこし】

些 百人にすぐれたること。例豪傑。英傑。

瑣 些少と連用す。數少きこと。細の意なり。瑣細。瑣物。瑣屑などいふ。

【すすぐ】

雪 清くする意にて、寃罪をすゝぎ、恥辱をすゝぐ等に用ゐる。例雪寃。雪辱。

漱 口を洗ひ清むる意。例盥漱。

澣 衣服を洗濯する意。例澣濯。

【すすむ】

進 人にかくせよと催しすゝむる意。例進軍。進取。進歩。進路。進化。新進。

勸 退の反對。前方に出づること。例勸業。勸善。勸誘。勸學。勸告。

薦 神に物を獻ずる意より、轉じては、人才推擧の意にも用ゐる。例鬼神に薦む。推薦。薦舉。

奬 擧めはげます意。例奬勸。推奬。

前　後の反對。前方へすゝみ出づること。進よりは弱し。例前進。席を前む。膝を前む。

羞　人に食物を饗しすゝむる意。例膳羞。

【すつ】

捨　用の反對。用ゐるべきものを、とりあげざるをいふ。例取捨。用捨。喜捨。

棄　不用のものとしてすつる意。故に捨よりも其意強し。例民を棄つ。甲を棄てて走る。投棄。拋棄。廢棄。

廢　「ステモノ」、又は「スタリモノ」にする意。例廢物。廢業。廢止。

委　先方に任せてすておく意。例溝壑に委す。落花地に委す。

釋　持ちたる物を手よりはなす意。例手卷を釋つる能はず。

捐　不用として、他に仕末して置く意あり。例金を山に捐つ。義捐金。

遺　とりのこし置きて、先きへ行く意。例未だ仁にして其親を遺る者は有らず。遺棄。

【すでに】

既已業　既已業。

【すなはち】

則　將の反對。「ツタル」、「ヨハル」とも訓みて、全く事の終りたるにいふ。

卽　未の反對。事の今成りしこと、今終りしことにいふ。

乃　勢定まりて、跡に引かざる場合をいふ。

輒　則卽乃便載。上をうけていふ辭。法則、規則の則にて、原因結果の法則を述ぶるにいふ。「ソノトキハ」といふに當る。例大叔に與へんと欲せば臣請ふ之に事へん、若與へざれば則請ふ、之を除かん。

「スグサマ」、「ヂキニ」の意にて、「取モ直サズ」と譯す。其場を離れぬこと。例卽刻。卽時。卽今。卽席。

「ソコデ」の意。此時より彼時に移る渡合の辭にて、上の文と下の文との繼目に置く。畢竟詞の移りめをゆるやかに言ひ出す意なる故に、緩之辭と註せり。

「迺」字とも通用す。例河に至る、乃復へる。

其度毎に「イツデモ」の意。例張負が女孫は、五度嫁して夫輒死す、人敢て娶ることなし。「輒」は「輒」の俗字なり。

便　手早くの意。時の上につきての辭なり。即よりは意緩く輕し。例 便之を殺す。

載　承け載する義にて、上を受くる詞「タヤスク、ツヒ、ソノママ」といふに當る。例 載欣び、載弃る。載飛び、載止る。

【すなほ】

朴素質　朴素質。器の下地作り、又はあらき作り、とも譯す。例 質朴。朴直。淳朴。かざりのなきこと。白きぬ、白くて染めぬ衣。例 朴素。質素。文の反對にてかざりなきこと。例 質素。質實。朴質。

【すべて】

總凡　總凡、都渾統　絲をくゝる意より、轉じて概括の意に用ゐる。例 總計。總數。總理。「大ヨソ」の意。例 凡例。

都渾　寄せ合せて、一體にみなの意。都に同じ。

統　一つにする意。例 統一。統計。

【すみやか】

速　遲の反對。猶豫せぬこと。例 早速。速斷。

亟　急にする意。亟は「シバシバ」の意の時には音キ也。

【すむ】

住　住ユウ棲セイ栖セイ　「止ル」とも訓みて、居所を定めて居る意。假りに住む意。又、鳥獸蟲魚などの巣に居ること。

棲　棲に同じ。

栖　栖に同じ。

【すむ】

清　清澄チョウ　濁の反對。水のすむこと。例 百年河清を俟つ。河の清むを俟たば、人壽幾何ぞ。

澄　水靜而清と註す。水のすみわたりたること。

せの部

【せばし】

狹　隘アイ褊ヘン窄サク

狹隘 廣、博、寛、濶等の反對。最も廣く用ゐらる。例 狹隘。狹窄、狹少。
開隔のせばきこと。例 隘巷。

褊 衣服の身幅の狹きことにて、それより地形にも、見識度量の上にも用ゐらる。
例 附庸褊小の國、局量褊小。

窄 寛の反對。内のせばくして、受け容るゝことの少きをいふ。

【せまる】

迫 急に或事に押しつまること。例 切迫。迫害。逼迫。急迫。

逼 間近く詰め寄れることにて、急の意なし。例 眞に逼る。

薄 逼に似たり。されどこは、物と物との間のうすき意にて、漸々せまりゆくこと。
例 肉薄。

【せむ】

攻 城寨等をせめ伐つことにも、人を非難することにも用ゐる。例 攻擊。攻守。人の惡を攻む。攻伐。攻城野戰。

責 罪過を問ひ正す意。例 責問。責任。言責。責務。責讓。

譴 言語にて、嚴重に叱りせむること。例 嚴譴。譴責。

讓 事の仔細を問ひ糺して、せむること。責よりは穩なり。例 責讓。

その部

【そこなふ】

害 損、傷、殘、賊、戕

損 利の反對。物事を破壞する意。例 殘害。損害。害毒。傷害。

傷 「キズツケ、ヤブル」意。例 毀損、損害。破損。

殘 「キズツケ、イタムル」意。例 負傷。損傷。

賊 殺人。刑戮。傷つくること等に用ゐる。例 殘賊。

戕 人の心性をそこなふ意。例 人の子を賊ふ。
毀害の意にも、小兒を殺す意にも用ゐらる。

【そしる】

誹 誹謗、譏、毀、詆、訾、刺

謗 人の短所を非難すること。例 誹謗。誹譏。
陰にて、惡しざまに評し、その人の評判を惡しくすること。例 讒謗。

譏　先方の缺點を咎めて、そしり笑ふ意。例 誹譏。譏刺。

毀　譽の反對。こばちそしりて、人の名譽を損ずること。例 毀損。毀訾。

詆　遠慮なく、そしり辱むる意。例 退之書を作りて佛を詆る。歴詆。

訾　疵なきを、強ひて疵をつくり出でゝ非難する意。例 誹訾。

刺　針にてさす如く、鋭く非難する意。例 諷刺。譏刺。

【そゝぐ】

注　水路を通じて、一筋に水を流し入るゝ意。例 注射。流注。注入。注目。注意。

沃　柄杓にて、ザブリと酌み掛くる意。例 啓沃。湯を雪に沃ぐ。

濺　水などの、とばしりかゝる意。例 頸血を以て大王に濺がむ。

瀉　注よりも一層強く流れ落つる意。例 一瀉千里。瀉落。吐瀉。

洒　少しづゝ水を撒く意。例 洒掃。

漑　溝をつけて、田又は池澤などに水を引くこと。又川流を堰き溜めて流しかけ、水攻めにするにもいふ。例 灌漑。漳水を引きて鄴に漑ぐ。

灌　漑と注との意を兼ぬ。又草木に水をやるにもいふ。例 灌漑。百川河に灌ぐ。

灑　洒に同じ。

【そなふ】

具　物事の足り揃ひ、とゝなふ意。例 具足。完具。具備。

備　物の數々を、豫め支度し置く意。例 準備。豫備。兼備。

供　そなへものにする意。例 供御。供給。

【そばだつ】

敧　片上りになること。斜となる意にも用ゐる。例 風枝敧つ。雨を帶びて敧つ。

側　そばだつとも、かたはらとも訓む。正面より見ず、わきより見たる貌にいふ。例 反側。帽側つ。目を側つ。

峙　山の屹立する貌と註す。例 對峙。

【そむく】

叛　裏がへり、變心する意。例 叛逆。謀叛。叛亂。離叛。

畔　叛と同字なり。

反　「ヒツクリカヘル」事にて、叛と同意なれど、狹くして急なるに用ゐる。例 反

背　抗。反駁。反對。謀反。

倍　人を背にして、ふりすつる意。例背反。違背。背戻。

乖　背に同じ。

負　さからひ違ふ意。例乖離。乖背。乖反。

【そらんず】

諳　物をうしろにする意。例恩に負く。德に負く。

誦　諳誦。

【それ】

夫　物を便りとせず、そらにて事物を覺ゆること。例諳記。

其　さしつかへなく述べたつること。例諳誦。通誦。誦讀。

夫　輕くして、指す所なきが如く、發語に似たり。

其　「ソノ」と讀む時よりは、輕けれど、夫よりは狹くして重し。

たの部

【たかし】

高　崇　隆　喬

高　卑、下、低等の反對にて、無形、有形共に用ゐらる。

崇　山の極めて高くて、見るも恐ろしきばかりなるをいふ。例崇廣。崇拜。尊崇。

隆　中央の、弓形に高くなれるをいふ。例穹隆。

喬　高くそびえ立てるをいふ。例喬木。喬岳。

【たかどの】

樓　二階屋なり。例城樓。望火樓。

閣　高きやづくり也。例高閣。

【たがひに】

互　物事の、入りちがひ、食ひ違ひになりたるをいふ。例交互。

迭　更りあふこと。例更迭。迭立。

遞　次々に承け續くるをいふ。例驛遞。遞信。遞送。

【たがふ】

差　差違。參差。

違　事物のくひちがふをいふ。例違背。違反。相違。違法。

【たから】

寶財貨貨

寶財貨貨。すべて珍重すべきものゝ稱。金銀のみに限らず。例至寶。珍寶。人の用に供すべきものゝ稱。例財政。財産。財寶のこと。例貨幣。金貨。それだけの價値あるもの。

【たき】

瀑瀧

瀑瀧。高處より落ちくだる水をいふ。例瀑布。布曳瀑。華嚴瀑。奔湍也と註す。急流のことなり。國語に、たぎち流る、たぎる、などいふに當る。

【たくはふ】

貯蓄儲

貯蓄儲。入用だけの物をかこひ置くこと。例貯藏。貯粟。貯蓄。取集めて藏め置くこと。餘裕さへあれば藏めおくなり。例蓄財。蓄髮。蓄積。立て代への物を、豫め用意にたくはへおくこと。例國儲。儲君。倉儲。儋石の儲。

【たぐひ】

類匹疇屬比倫

類匹疇屬比倫。似よりたるをいふ。例比類なし。類似。ならびたること。例秦晉は匹なり、何を以て我を卑む、と左傳に見ゆるが如し。似よりたること。例匹疇。其の或物の部類のこと。釣合の等しきこと。筋を引きたること。例人倫。絶倫。

【たくみ】

巧工

巧工。拙の反對。具合よく取合はすこと。例巧匹。巧笑。職人といふこと、其事に專らなる人をいふ。例工人。精工。

【たけなは】

酣闌

酣闌。酒宴の最中の意より、物の盛りなるをいふ。例興酣。宴酣。過半事の終りたる時をいふ。例酒興闌。

【たすく】

輔佐佑助扶援翼相資贊

輔佐佑助扶援翼相資贊。

輔 兩旁より、車輻の倒れぬやう、控木をなし置く意にて、轉じて倒れぬやうに、たすけて進ましむる意。例 輔佐。輔弼。輔助。輔行。

佐 手の身にそへるが如く、傍にありてたすくる意。例 良佐。佐に同じ。佑は祐とも書く。

佑

助 力を添へてたすくる事。例 助力。助勢。助手。救助。

扶 手を添へて支へたすくる意。例 扶持。扶助。扶翼。扶老。

援 引き上げたすくること。例 後援。援引。援兵。聲援。外援。

翼 鳥の翼の如く、身をたすくる意。又、鳥の子を翼の中に入れて、養ふ故に、養育の意ともなる。例 輔翼。扶翼。翼贊。

相 輔の意に似たり。且、長上の缺點をたすくる意あり。

資 外よりとりて、たすけとする事。例 資力。外資。資産。

贊 言語を以て、たすくる意。例 贊助。贊辭。

【ただ】

唯 唯惟只但徒啻「バカリ」と譯す。獨の義なり。例 唯天を大なりとす。其れ唯聖人乎。

惟

只

但

徒

啻

音義共に唯に同じ。殆助語の如くに用ゐらる。例 只今。只獨。「バカリ」といふ意に用ゐる。「タダシ」とよむ時は、違へり。「タダ」。「タダニ」。「空シク」。「イタヅラニ」などの意に用ゐらる。疑問又は、打消の語を添へて用ゐる。例 不啻不敢含怒。何啻……の如く用ゐられ、一字にて用ゐることなし。

【たたかふ】

戰 兩方より打合ひ勝負を決するをいふ。戰亂。例 戰爭。戰陣。戰端。戰役。戰沒。混戰。

鬪 勝を爭ふことにて、個人同士の、爭ひをいふ。例 搏鬪。決鬪。爭鬪。戰鬪。

搏 兩方より打合ひ組合ふこと。例 搏鬪。

【たたく】

叩 音の閉ゆるやうにたゝくこと。例 叩頭。叩門。

敲 叩よりも甚しく打ちたゝくこと。例 推敲。敲門。

扣　叩に同じ。

【ただす】

正　正訂（セイテイ）糺（キウ）匡（キヤウ）規（キ）繩（ショウ）格（カク）貞（テイ）（自動詞の時にはタダシ　他動詞の時はタダス）

訂　邪の反對。よこざまなるを、眞直にたゞす意。例 正義。正誤。正道。正理。改正。

糺　文字の誤を吟味し直すこと。例 訂正。訂盟。訂約。

匡　監督吟味して、曲れるを直すこと。糾と書くも同じ。例 糺問。糺明。

規　救ひ正す意。例 匡救。匡正。

繩　「ブンマハシ」の事にて、法を以てゆがみたるを直す義。例 規諫。規止。

格　墨繩にて、ゆがみを正す義。例 繩愆。

貞　正の意。法度格式に合ふやうに正すこと。

【ただちに】

直　正に固の義を兼ぬ。例 忠貞。貞婦。貞女。貞節。貞烈。

徑　直徑（チヨクケイ）すぐさまといふ意。例 一老父の褐を衣たるものあり良が所に至り、直に其履を圮下に墜す。

手短にの意。例 徑に布衣より登用す。徑に往いて蜀漢を卷き、三秦を定めむ。

【ただる】

糜　糜爛（ビラン）と連用す。粥の如くに、ただるゝこと。財力を費消し民力を疲弊（ヘイ）せしむることに用ゐる。

爛　燒けたゞるゝこと。

【たちまち】

忽　忽（コツ）乍（サ）倏（シユク）頓（トン）

乍　思ひがけなく「フット」の意。例 忽焉（コツエンシユクコツ）。倏忽。

倏　「チラト」。又は「チヨット」の意。瞬間（シユンカン）に變化（ヘンクワ）する意。例 乍見（タチマチミエタチマチノツス）。滅。燈將（トウマサ）に滅せんとして、乍ち明なり。

頓　忽に似て、更に速力の敏疾なるをいふ。遽（ニハ）かの意。滯（トドコホリ）なく終結（シウケツ）する意をも含む。

【たつ】

立　立建（リツケン）起（キ）竪（ジユ）植（ショク）樹（ジユ）

建　仆の反對。たしかに立てる意。例 獨立（ドクリツ）。孤立（コリツ）。確立（クワクリツ）。成立（セイリツ）。設立（セツリツ）。立后（リツコウ）。

起　組みたつる意に、始（ハジ）むる意をも兼ねたり。例 建國（ケンコク）。建設（ケンセツ）。建業（ケンゲフ）。建造（ケンザウ）。

坐の反對にて、身を起（オコ）して立つ意。例 起立（キリツ）。起居（キヨ）。發起（ホツキ）。起臥（キグワ）。

竪 横になれるものを竪つる意。

植 木を植ゑ立つる義より轉用す。例 其杖を植て、芸る。

樹 植に同じ。例 德を樹つ。黨を樹つ。

【たつ】

断 断絶 截裁 物を二つにたちきることにも、又、切り離れたることにも、轉じては決断の意にも用ゐる。例 二人心を同じくすれば、其利金を断つ。断斤。断碑。断雲。断絶。裁断。断獄。果断。

絶 絲のきれたる義にて、それより、物のきれて續くべきあとのなきこと。例 絶筆。絶交。絶壁。絶命。

截 きりたちて、續かずなれる意。絶に似たり。例 截断。直截。

裁 衣服にする布帛類をたつことにて、長きをたち、餘れるをたちて、宜しくする義。例 裁縫。裁断。

【たづぬ】

尋 尋原 討 踪 繹 ある事に引繼ぎて、それより其筋に據りたづね求むること。例 尋求。尋問。

原 物事の源をおしたづぬる意。例 始を原ね、終を要す。

討 拠りたづぬる義、尋よりも重し。例 討論。討究。

踪 足あとをしたひたづぬる意。例 踪跡。失踪。

繹 絲口を引出す意より、たづぬることに轉用す。

【たて】

干 干盾 矢丸を防ぐ武器。

盾 干に同じ。

縦 縦經 横の反對。

經 緯の反對。元來織機の經絲、にて、緯絲に對す。

袤 延の反對。東西を延といひ、南北を袤といふ。

【たてまつる】

上 上奉 獻 呈 さしあぐること。此字は元下の反對にて、物のうへにする意なれば、それより「アグ」とも「タテマツル」とも訓じて、貴人に物をあぐることに用ゐる。

奉　さゝぐ、とも訓じて、手にて高くさしあぐる意。
献　目のうへにさしあげて、貴人に物をあぐること。
呈　進上すること。

【たひ】

縱　縱令　假　假令　假使

縱　縱に同じ。但し縱は自ら行く意にて、縱令は他人が強ひて行かしむるといふ時に用ゐる。

縱令　「ヨシヤ」の意にて、「サハナキ筈ナレドモ」、「カリニ其ニシタ所ガ」などいふに同じ。

假　かりに設けていふこと。

假令　とても出來ぬことを、今假りに出來るとしてもといふ意。

假使　人を使役して、或事業をなす時の假設に用ゐる。

【たこへ】

譬　譬喩。例　或事を人に曉らしめんために、他の類似せる事を假りに設けて、諭すことなり。

喩　譬に同じけれど、諫めさとす意をも有す。
例　多數の事實中にて、其一例を採り、或は類似の事を擧げて說き示さんためにたとふるをいふ。例　例言。凡例。例話。例題。引例。

【たに】

谷　谷。
谿　兩山間の低地をいふ。
溪　水流のある谷をいふ。
壑　谿の字の俗字なり。
澗　谷に同じ。

【たのしむ】

樂　谿に同じ。されど谿は細流なるにいひ、澗は水の廣く深きにいふ。
娛　樂。樂天地。樂土。
嬉　苦の反對。心おもしろき事。例　行樂。
愉　憂を慰め散ずること。例　琴書を以て娛となす。娛樂。
嬉　あそび、たはむるゝ事。例　群嬉。嬉戲。
愉　氣をかへてたのしむ意。例　愉快。愉色あり。

【たのむ】

賴　賴。力にして、たよること。例信賴。依賴。

怙　堅固なる要害の如く、我身のたよりにすること。例怙恃。

恃　手に物を持つが如くに、心のたよりにすること。例負恃。德を恃む。力を恃む。

憑　物にもたれかゝり、よりかゝる意。

負　うしろだよりにする意。例貴を負む。

【たひらか】

平　高低なく、かたづらぬこと。例昇平。太平。清平。山平なり。潮平なり。平安の義。例平坦。坦易。道を履むこと坦々たり。

坦　其義平に同じ。險夷と對用す。例王道陵夷。又剿滅する意にも用ゐる。其時は「タヒラグ」と訓す。三族を夷ぐなどいふこれなり。

夷

【たふ】

堪　堪耐。任勝。こらへ忍びて、物事をなし遂ぐる事。例堪忍。

耐　迫害を意とせずして、もちこたふる事。例耐久。忍耐。

任　我力量の續くこと。例其事に任ふ。責任。大任。

勝　物に爭ひてうち勝つ意。例魚鼈、食ふに勝ふべからず。

【たふとし】

尊　尊。貴。崇。尚。上。（自動詞の時はタフトシ　他動詞の時はタットブ）卑の反對。道德、爵位、年齡等の高きを敬ふ稱。例至尊。尊長。尊君。

貴　賤の反對。官位高く上品なる人、又は價の高きものをいふ。されど、敬ふ意はなし。例貴顯。貴賓。富貴。貴重。

崇　あがむることにて、畏敬の意。尊よりも其意強し。例崇尊。崇敬。崇拜。

尚　大切にして我上に置き、たつとぶこと。尊に似て其意弱く好む意あり。例高尚。風尚。尚武。

上　音義共に尚に同じ。

【たふる】

倒　倒。仆。斃。殪。顚。踣。僵（自動詞の時はタフル　他動詞の時はタフス）仰のけざまに、たふるゝこと。又、さかさまになるにもいふ。例轉倒。絕倒。倒懸。

仆　横にたふるゝこと。例詐り仆れて地に臥す。車仆れて馬斃る。
斃　殺されてたふるゝこと。又、自然にたふれ死する意。例敵を射て一人を斃す。斃死。斃れて後已む。
殪　斃に同じ。
顛　上よりさかさまにたふれ落つる意。例顛墜。顛落。顛倒。顛覆。
踣　つまづき仆るゝ意。
僵　俗に「フンゾリカヘル」といふ意。

【たま】

玉　珠　璧　圭　瓊　球

山より出づる石の美なる者の稱。轉じて美しき者の形容詞とす。例女ありて玉の如し。玉山崩る。玉石混淆。
珠　水中より出づる貝類にて、つくりたるたまをいふ。例眞珠。
璧　圓き玉をいふ。
圭　水晶の形の如く、上の三角に尖りたる玉。
瓊　赤色の玉をいふ。
球　鞠の如く圓き者。

【たまたま】

適　偶　會

適　折善く丁度といふ意。的と同じ義にて、丁度矢の的に中りたる意あり。
偶　思ひよらず、「フト」あふ意。例偶然。偶成。
會　出であふ意にて、面會などいふ如く、兩者の合するをいふ。

【たまもの】

賜　賜　賜　賚

賜　褒賞して、物をたまふこと。例恩賜。賜暇
賜　くだされものゝこと。例敢て賜を拜せざらむや。公事に當りて私賜を受けむや。
賚　賜に同じ。例周に大賚あり善人是れ富む。

【たまりみづ】

潦　潴　溜

潦　雨水などのたまりたるもの。例行潦の水。
潴　ためおきたる用水のこと。
溜　潴に同じ。

【たみ】民氓

民　廣く國人を稱する辭。公羊傳に、士農工商を四民と云ふとあり。

氓　流れわたりの民にて、土著の者にあらぬをいふ。

【たる】足贍給

足　物事の十分なること。例充足。

贍　物事のゆきわたること。例富贍。

給　贍の意に同じ。例支給。補給。家ごとに給り、人ごとに給る。

【たれ】誰孰

誰　專ら人を指していふ。例問ふ是れ誰が家の墳ぞ。蕭相國卽死せば、誰をして之に代らしめむ。

孰　誰と同じ意なり。

ちの部

【ちかし】近邇庶

近　遠の反對。隔りの少きこと。

邇　遐の反對。はるかならぬこと。近の如く廣き意に使用せず。

庶　殆ど接近せる意。

【ちかふ】盟誓矢

盟　神に告げてちかふをいふ。その時は、牲を殺して神に供へ、その血を器皿に入れて共にすゝり、ちかひに背かば、この牲の如くに神罰をうけんとの意。故に盟字に皿を交ふ。例會盟。盟主。

誓　言を以て約束すること。故に誓字に言を交ふ。盟よりは輕し。例誓約。宣誓。誓言。

矢　矢の直行して、方向を變せざる如く、ちかひし言を變せざるをいふ。

【ちち】父考

父　男親のこと。

考　亡父のこと。

【ちまた】衢

衢　街巷。

街　眞直の大道をいふ。

巷　曲れる小道をいふ。

衢　四方に路の分れたる辻路をいふ。

【ちり】

塵　乾ける土の、粉末になれるをいふ。それより、微細の物の散飛せるものゝ稱とす。

埃　塵の空中に漂へるもの。

【ちる】

渙　萃の反對にて、流散の義也。

散　聚の反對。あつまらぬこと。大學に、財聚れば則ち民散ず、財散ずれば則ち民聚る。とあるが如きをいふ。

つの部

【ついで】

序　ものごとの次第をいふ。例長幼序あり。順序。秩序。

紋　序に同じ。

秩　序に同じ。

【つかさどる】

掌　おのが職分だけをつかさどること。例職掌。分掌。鞅掌。

典　或事を十分に支配する意。例典藥。典膳。職を典る。

司　下の者を支配する意。例有司。國司。

主　おのれ主となりて、大切に取扱ふこと。例主宰。主要。

宰　人の頭となりて、差圖すること。主と相似たり。例宰領。主宰。宰相。

【つかふ】

使　指揮してつかふこと。例使命。指使。役使。使者。

仕　主人をもちて奉公すること。例奉仕。給仕。任仕。

事　長上の人の用事をつとむること。例君父に事ふ。師に事ふ。

【つかる】

疲　憊　罷　羸

疲　俗に「ダタビレル」といふに當る、精神氣力の衰へ弱ること、疲に同じ。例老憊。

憊　憊に同じ。益州罷弊すと出師表にあるが如し。

罷　やせ衰ふること。例羸弱。老羸。羸兵。

羸

つく

就　利に就く。死に就く。就職。去就。成就。

著　卽付附　共處へ行くこと。近く寄りそふこと。例密著。著用。著服。土著。著實。到著。

卽　密接せるにて、ひたとつくこと。例卽位。座に卽く。

付　登る意。授け渡す意。例付託。交付。

附　つき從ふ意。例附庸の地。附屬。驥尾に附く。附會。附錄。附言。附隨。

つく

突　突衝撞搗　急につきあたる。不意に進み出る。例突起。突出。突擊。突貫。突破。突進。突然。

衝　つき當る意なれども、突よりはその意弱し。例衝突。怒髮冠を衝く。衝路。衝

撞　出。衝入。

擣　或物を或物にうち當つること。例鐘を撞く。撞著。

搗　臼にてつくこと「ウヅ」とも訓む。例藥を擣く。砧を擣つ。五穀を臼にてつくこと。例米を搗く。餅を搗く。

つぐ

續　繼嗣接次亞襲　斷の反對。斷絶せるものを、つぎつづくること。例陸續。斷續。連續。繼續。

繼　事物の後を受けつぎ、又は絶えたるをつぐこと。例繼續。繼承。後繼者。繼母。

嗣　よつぎにて、親の後を承けつぐこと。例嗣子。繼嗣。

接　二物をつぎ合はすること。例接木。接近。密接。

次　順序次第をつぎゆくをいふ。例次官。日次。次第。次長。目次。

亞　次に同じ。例亞流。亞聖。

襲　前者のやうに、重ねて受けつぐ意。例襲爵。世襲。因襲。

つぐ

告　告諗　他に知らしむること。「コウ」の音の時は、上より下に告ぐる時。「コグ」の音の

諗　時は、下より上へ告ぐる時なり。例告文。廣告。告白。上告。宣告。
誥　告と同じ。
【つくす】
盡　天子より臣民に告げ給ふ布告文をいふ。
竭　盡に同じ。
悉　有るたけのことをなし極むること。例盡力。盡瘁。盡心。
罄　一つも殘さぬこと。例悉皆。詳悉。知悉。
殫　物を使ひつくして、空しくすること。
殲　殘らず取りたつること。例精を殫す。重稅苛斂民力を殫す。
殲　殘らず殺すこと。例殲滅。殲盡。
【つくる】
作　事物をこしらへ始むること。例作意。作物。作詩。作文。作歌。創作。
造　事物をこしらへ建つること。例造作。造船。造化。釀造。造詣。造語。創造。造營。

製　衣を裁ちてつくるが如く、物を工夫してつくり出すをいふ。例製鐵。製品。製藥。製造。製法。
爲　しわざとも訓む。唯何にても、つくること。例人爲。作爲。造爲。所爲。行爲。有爲。無爲。
【つち】
土　土壤。地。
壤　草木の生長する處。それより國の意にも用ゐる。例塵土。王土。國土。
地　土に同じ。
萬物を載する處。例地球。輿地誌。天地。地方。地形。地面。
【つつしむ】
謹　言語をつゝしむこと。例謹直。謹言。謹嚴。謹慎。
慎　事を處するに、心の上に注意し、つゝしむこと。例慎重。誠慎。戒慎。
肅　恭しく、つゝしむ意。例肅然。嚴肅。肅啓。
欽　畏敬の義にして、多く天子の上にいふ。例欽明。欽定。欽差。
恪　謹慎の二字を合せたる意にて、物を大切にすること。

【つつみ】

堤防　堤防塘坡塢

土を築きて水を遏めたる者にて、其の兩方に水のあるをいふ。

堤に似て廣く、一方にのみ水のある者。

水拔きのある處にて、堰の類をいふ。

野池をいふ。其の周圍、土を築きて土手となりをるにより、堤防と同じやうに用ゐる。

小き土手のこと。例 柳塢。桃花塢。

【つつむ】

包裹韜蘊

風呂敷などにて、物をつゝむ意。

袋の中に入るゝこと。

外に顯さず、他に知らしめぬやうにすること。例 韜晦。

深く藏めて、外に洩らさぬこと。例 蘊蓄。蘊奥。

【つとむ】

勤勉務勗力努

惰の反對。惰らず勵みて精出すこと。例 勤學。勤行。勤苦。勤勞。勤王。勤番。

力の及ばぬを堪へ忍びて、精出すこと。例 勉强。勉學。勉勵。勤勉。

力を一途にこめて從事すること。例 職務。事務。公務。本務。政務。國務。勤務。

先務。急務。義務。專務。

勉に同じ。勵ます意に用ゐること多し。

全力を擧げてつとむること。例 力戰。力行。力學。努力。

一息に精力を出し、力をこめて勵む意。

【つねに】

常恆毎

常（ふだん（平常）、ひごろ（日常）などいふ如く絶えず連續せることをいふ。且つ不變。不奇。不怪の義を有す。例 常道。常套。常態。常法。常典。常狀。常住。

常規。無常。

恆久と熟するが如く、一定して何時も、變化せぬをいふ。「ツネニ」と訓む時は常と同じけれども、多くは恆産、恆心などの如く形容詞のやうに用ゐる。例

恆德。恆例。恆星。

毎度、たびごとになどの意。

庸　常に同じ。例 庸劣。庸醫。庸才。庸主。庸君。庸人。

【つひに】

遂　遂終竟　遂終竟　卒　此事よりして、彼事に及び、そを成し遂げたる意。始の反對。「果テマデ」「果テハ」「トウトウ」などの意。例 終結。終局。終末。「ヨハリ」と訓み、畢意と熟するが如く、つまりといふ意なり。始、中、終をこめていふ語。

【つぶさに】

卒　始と中とを除き、終局の結果をのみいふ。「ハテハ」、といふ意。

具　具備　具、備　手落ちのなきをいふ。備も同じ意なり。

【つまびらか】

詳　詳審諦　詳審諦　審　詳略の反對。明細にすること。例 詳說。詳解。詳細。詳密。念を入れて、確實にすること。例 審査。審判。審問。審議。審理。

諦　シカトの意。例 君諦視之、勿誤也。諦聽。

【つまづく】

蹶　蹶跌蹉跎躓　蹶　足をくじきて、はねかへること。

跌　自分に、うかとふみはづして、つまづくこと。

蹉　足のもぢれて、つまづくこと。蹉跌と連用す。

跎　足の他へそれて、ふみつけの定まらぬこと。それより時を失ひ、志を遂げぬことに轉用す。例 蹉跎たり白髮の年。

躓　足の物にさはりて、つまづくこと。廣く用ゐる。例 顚躓。淪躓。

【つみ】

罪　罪　罪　とがの定まりたること。例 天有罪を討ず。匹夫罪無し、璧を懷いて其れ罪あり。

辜　とが人に、名の付きたること。罪よりは輕し。例 無辜の民。

【つよし】

強　強毅　強　弱の反對。力の多大なること。

勁　強の上に剛の意を含む。

毅 剛氣にして忍耐力のつよきにいふ。

【つらなる】

連 連聯陳列羅（自動詞の時はツラナル、他動詞の時はツラヌル）物と物との、次々につゞきたるをいふ。自他通用す。例 連山。連日。連珠。連理。流連。

聯 器、連に似たり。されど連は一筋につらなる意に用ゐらるれど、聯は幾筋にもなりて續く意に用ゐらる。例 聯鎖。聯隊。聯邦。聯合艦隊。聯合軍。

陳 順序を立てゝ、ならべ敷く意。例 陳列。敷陳。

列 ならびつらなること。例 列坐。行列。羅列。排列。列聖。列國。列立。

羅 網の目、又は絹の目の如く、細かに順序正しく竝ぶこと。例 羅列。星羅。

ての部

【てらす】

照 光をさし向くる意。例 日月照す。照臨。照覽。

燭 照よりも小き光をいふ。燈燭の燭の義なれば轉じて照す意に代用することも

間々あり。

との部

【とがむ】

咎 咎尤科

「トガ」と訓む時は名詞となる。道理、法度、約束等に違ひたるを、責めとがむること。例 既往は咎めず。

尤 覺えず爲したる失錯をとがむること。

科 「トガ」とも、「トガメ」とも訓ず。掟の箇條なり。例 姦を作し科を犯す。

【とき】

時 時秋辰

一日中の時間、一年中の四時、又は廣く時節の意に用ゐらる。例 時刻。時期。時間。時限。曠時。

秋 秋は四時中物の成熟する時なれば、肝要の時節といふ意に轉用して、「トキ」と訓む。例 危急存亡の秋。

辰 一歳十二月に、日月の會すること凡そ十二度あり、之れを十二辰と名づく。そ

れより之れを一日の十二時に配當したるにより、「トキ」と訓ず。例佳辰、良辰。吉辰。

【とぐ】

研磨　研磨。研砥。研礪。

藥研にて、細末にすること。又、鉢にて、することにもいふ。

砥石を以てとぐこと。轉じて人の性行の上に用ゐる。例研磨。磨礪。琢磨。

磨に同じ。

礪　磨に同じ。

【ところ】

所　所處。

名詞として用ゐる時は、其場所又は方角をいひ、助辭として用ゐる時は、所以所爲など、指示の意となる。

處　居所、場所の意に用ゐらるれど、所の如く指示の意なし。例到處。住處。萬物その處を得たり。

【とし】

年　年歲。

四季の順序ありて、穀作物の一度成熟することにつけていふ言にて、豐年、凶年、又は豐熟の年のことを、大に年ありなどいふ。

歲　年と同じけれど、元來は星の天を一周することに就きていへるなり。穀物の上につきては用ゐず。

稔　年と同じ。

【とし】

疾　疾迅。疾風。疾走。大聲疾呼。疾雷。

迅　徐の反對。例迅急。迅雷。

敏　すばやきこと。鈍の反對。「トシ」とも、「サトシ」とも訓じて、「ハヤキ」意、又悧發なる意。例聰敏。明敏。不敏。

【とじ】

閉　閉門。閉戸。閉鎖。

闔　門戸等をとづること。開の反對。例開闔。

鎖　門戸を雙方より寄せとづること。錠をおろす意に用ゐる。門、戸、器具等に廣く用ゐる。

緘　とぢ合せて、出入のできぬやうにすること。

杜

【ととなふ】

齊　内部へ入りこむことのできぬ様に、禦ぎとむること。例杜絶。

整　齊整。調。行儀よく、先きを一列にそろふること。例齊一。齊整。手落ちのなきやうにすること、行儀正しくすること、秩序正しくすること等に用ゐる。例軍旅を整ふ。衣を整ふ。紀綱整はず。整理。整頓。程よく和合する意。例陰陽調はず。調和。調劑。調停。調子。調合。

調

【ととむ】

留　留駐。停止。遏（自動詞の時はトドマル　他動詞の時はトドム）一處に久しく居ること。抑へてとめ留ること。例逗留。滯留。拘留。留致。留任。遺留。淹留。寄留。

駐　留に似て一層重き意に用ゐる。例久駐。駐在。駐輦。駐蹕。

停　中途にて、暫くとゞまること。例停車。停止。停職。停滯。停學。

止　動かずして、とゞまる意。例禁止。廢止。中止。動止。

遏　せきとめて向うへやらぬ意。例行雲を遏む。

【ととなふ】

唱　音頭をとること。例唱和。首唱。

稱　いひたつること。例言へば必ず堯舜を稱す。

徇　ふれまはること。例道人木鐸を以て、路に徇ふ。

【とばり】

帷　圍也と註す。室内の四方をかこみて。外より見えぬやうにせる垂布。例帷を下して教授す。帷幄。

帳　四角に造りて、天井のあるもの。例蚊帳。臥帳。羅帳。

幔　幕の如くに長く連るもの。

幌　軒より垂るゝ掛布。日よけ、塵よけの如きもの。

【とふ】

問　問訪。訊問。咨詢。答の反對。廣く物をたづね聞くことに用ゐる。例質問。訪問。訊問。疑問。存問。反問。

訪　此方より往きて人をたづぬること。例訪問。御來訪。

訊　とひたゞすこと。問に似て詰る意ありて強し。例訊問。鞫訊。

咨詢　事をとひ謀る意にて、相談すること。例 咨問。咨詢。信實にとひ謀る意にて、咨咨に同じ。

【こぶ】

飛霏　飛霏。つばさにて行くこと。物のはら〳〵と一面に飛び散るさま。例 雨霏々。雪霏々。

【こぶひ】

烽燧　のろしをいふ。唐詩に烽火照二西京一とあるが如きをいふ。元來きりび（左傳に鑽燧改火などあること）の義なれど、烽火の義に轉用す。

【こほし】

遠遐　近又は遐の反對。間の隔りたること。例 遠國。遠地。遠行。遐の反對。はるかなる意。

【こほし】

乏匱　乏匱。ことたらぬこと。例 缺乏。貧乏。窮乏。無くなりかゝること。

【こほる】

通徹透融　通徹透融。塞の反對。行きつまらぬこと。つかへぬこと。例 交通。通用。貫通。開通。精通。通計。通道。通路。神通。底までとほりぬける意。例 徹頭徹尾。徹底。貫徹。徹上徹下。つきぬくる、すきとほる、ぬきとほる意。例 透徹。透明。此と彼と相融通和合する意。例 融和。融解。

【こも】

朋友　朋友。同じ師に就きて學べる同門の人をいふ。例 同朋。志を同じくして親交せる人をいふ。例 益友。良友。畏友。

【こもがら】

輩曹儕徒　輩曹儕徒。自分と同じ位の連中。同じ事に從事する仲間の人々。似よりたる者の稱。自分の手下のもの。

【ともしび】

燈　燈燭にても、油にても、火をともしたる明りをいふ。

燭　蠟燭に火をともしたる者の稱。

【ともに】

共　共同の意にて、多數の者相集りて、互に相助けて一事を爲す意。

俱　一處にの意。例 玉石俱に焚く。兩虎俱に鬪ふ。馬と俱に斃る。

偕　一處にうち揃ふ意。例 偕老同穴。偕樂園。偕行社。

與　彼も此もともにの意。事物を相手にする意。例 與に謀りがたし。

【とらふ】

捕　捕捉者を追ひかけゆきて、とらふること。例 追捕。逮捕。生捕。捕獲。

捉　手どりにすること。

囚　召しとること。囚人といへば、召しとらへられたる人にて、名詞となる。例 幽囚。死囚車。

【とりこ】

俘虜擒　軍所獲也と註す。生得曰虜と註す。繩にてしばりたるいけどりなり。戰勝執獲曰擒と註す。我物にして、手ごめにとらふること。

【とる】

取　取捨與の反對。とりて我物にすること。えらびとること。とり用ゐること。例 取捨。奪取。

執　固く手に持ちて放さぬこと。例 固執。執行。執筆。執權職。執念。執達吏。

採　手にてえらびて摘みとること。例 採用。採集。採擇。

把　持つ、握る、攫む等の意にて、執よりは輕し。例 把握。把持。把束。

攬　とり集めて、手にて持つこと。例 集攬。總攬。

操　固く持ちつゞけて放さぬこと。例 操守。志操。操持。貞操。

秉　手に握る意。有形にも無形にも用ゐらる。例 秉彝。秉燭。秉矛。

なの部

【ながし】

長　永　脩

長永脩　短の反對。形體の上にも、時日の上にも用ゐらる。比較上の語なり。例長夜。長壽。長生。長年月。長距離。長大息。廣長舌。時日のながき事にて、形體の長き意に用ゐず。又、比較上の語にもあらず。例永久。永世。永年。永劫。永眠。永晷。年壽永し。たけ長く末細きこと。例脩竹。脩尾。

【なかだち】

媒　妁　介

媒妁介　婚姻のとりもちをすること。媒に同じ。媒妁と連用す。雙方のひきあはせをする事。紹介とも、媒介とも連用す。

【なかれ】

勿

勿毋無　禁止の辭なれど、勿よりは輕し。毋よりも輕き禁止の辭。「ナシ」と訓む時は、有の反對となる。例己に如かざるものを友とすること無れ。

【なく】

鳴　啼　泣　哭

鳴啼泣哭　鳥獸の聲を出すことにて、悲喜共に用ゐらる。名譽の世に聞ゆるにも用ゐる。例悲鳴。鶴九皐に鳴く。鳴鑾。佩環を鳴す。其名天下に鳴る。聲を立てゝなくこと。人間にも、鳥獸にも用ゐる。鳥獸に用ゐる時は、悲喜の區別なく用ゐる。例啼鳥。啼泣。聲なく、涙を出してなくこと。例號泣。悲泣。哭泣。聲をあげ、涙を流してなくこと。泣より重し。例號哭。

【なげうつ】

抛　擲

抛擲　投げ遣ること。投げ棄つること。例抛棄。抛擲。投げつくること。例地に擲ちて金石の聲あり。

【なげく】

嘆　嗟　慨

嘆　心に感ずること。讃美、憂愁、悲、喜何れにも通じて用ゐる。例長嘆。嘆息。感嘆。悲歎。嗟嘆。嘆願。

嗟　聲に發してなげくこと。例嗟嘆。咨嗟。怨嗟。

慨　心に口惜しがり、なげくこと。例慨嘆。慷慨。憤慨。

【なし】

無　無莫亡靡罔　無視。無比。無量。無極。無情。無責任。有の反對。何物にても、なきをいふ。例無理。無根。無限。無道。無聊。無慮。無定見。無爲。爲盡藏。

莫　なし、又はなからんやと訓む。比較上の語。例不祥焉より大なるは莫し。莫大。莫逆の友。

亡　存の反對。今まで有りしもののなくなる時に用ゐる。例亡狀。亡滅。亡命者。亡國。

靡　なくする意。古文に多し。

罔　無の字に似て、輕くして婉なり。議論文に用ゐて、敍事文には用ゐず。

【なす】

爲　何事かをすること。なると訓む時は。何々となるなどの自動詞となる。成よりはその意弱し。例有爲の士。所爲。無爲。行爲。

成　成就と熟して、事をなし遂ぐること。例成功。成績。成否。成業。

作　事をしはじむる意。又、爲と同樣に用ゐること多し。

濟　困難又は障害を經て、なし遂ぐること。例濟美。

【なづ】

撫　撫摩　小たゝきをすること。例案を撫す。書を撫す。琴を撫す。

摩　手馴付くること。

【なは】

繩　手にてさすること。例摩擦。剛柔相摩す。

索　繩索　その形狀の細大に係はらず、丁寧に作りたるなは。

繩　形狀の細大に係はらず、粗末によりたるなは。

索　矢張「ナハ」の意なれども、繩紲と連用する時は、「ナハメ」といふこととなる也。

繩　繩の條を看よ。

【なびく】

靡　嫋　裊

靡嫋　草などの、風に傾くことなり。嫋々と疊みて、長弱の貌と註す。柳の枝又竹などの、しなゆる形容詞なり。それより、舞姫の姿などのしなやかなるにもいふ。楚詞に、嫋々秋風兮、洞庭波木葉下とあり。

【なほ】

裊　嫋と同字なり。白楊信に裊々たり。裊はもと「裊」の俗字也。

猶　尙　仍

「マダ」「ヤハリ」などの意。物の不十分なるにいふ。例 就職以來日猶淺し。春色猶深からず。汝猶之を記せざるか。

尙　加ふる意を有して、「ソノ上ニ」「マダ」などいふに同じ。例 殘喘尙存す。關ケ原の遺趾尙在り。尙々序ながら申上げ候。敵兵尙退かず。

仍　いつも變らずの意。例 天變仍至る。甲越仍反目す。

【なほし】

直　曲、枉の反對にて、眞直なること。例 正直。直言。廉直。

縮　直と同義なり。孟子に自ら反して縮くば、千萬人と雖吾往かむ、とあるが如し。

【なまぐさし】

腥　血なまぐささこと。

羶　香くささことにて、羊肉の臭をいふ。

【なみ】

波　水の起伏する總稱にて、大小のなみ共に通用す。例 煙波渺茫。細波起らず。一波動いて千波起る。

浪　稍高き波の稱にて、石に激し、風に吹かれて起つ所のもの。例 波浪。高浪。激浪。

濤　波の最も激烈なるものにて、奔雷の音響を發して、高く起つものゝ稱。例 怒濤。松濤。

瀾　波の最も大なるものにて、海洋の波の、緩く穩かに大きく起伏するをいふ。

【なみだ】

淚　眼より出づる汁なり。例 數行の淚。紅淚千行。血淚潸々。

涕　絕間なく出づる淚なり。

【なやむ】

腦　腦と同字なり。

難　難と同字なり。

懊

腦　いかにせんと思ひ煩ふこと。例 懊惱。惱亂。苦惱。

艱難　行きなやむこと。難義なることに障りなやむこと。例 艱難。艱苦。

懊　艱の意に同じ。

胸苦しきこと。

【ならふ】

習　習效 倣 傚 肄

幾度も同じことを重ねてならすこと。例 學びて時に之を習ふ。自習。復習。習俗。習慣。練習。習字。

效　他の事物に似すること。眞似をすること。例 順を去りて逆に效ふこと勿れ。先例に效ふ。人の墾に效ふ。

倣　效に同じ。

傚　效に同じ。

肄　藝術を復習すること。例 業を肄ふ。

【ならぶ】

並　並(立)幷(併)雙 排 比

二つの物のならびて立つこと。例 並立。日月と並び存す。英雄並び立たず。

竝　並と同字なり。

幷　幷及び併は同字にて、並と同じ義に用ゐることもあれど、兼併、合併呑併など、二つ三つを一つにすることとなり。

併　幷の條を看よ。

雙　二羽の鳥の稱にて、一つがひのこと。例 一雙。雙方。

排　多くの者を押しならぶること。例 排列。排律。

比　間のすかぬやうにならぶこと。例 櫛比。比隣。比々として皆然り。

【なる】

馴　馴致。雅馴。

狎　鳥獸の人に親しみなること。又、手ならすことにも。例 狎妓。

狃　親しみなれて、心やすだてにすること。例 狎妓。

慣　なれて、つけあがること。故に輕蔑の意あり。

【なんぞ】

何　幾度も出合ひて、なること。例 習慣。何奚 曷 安 盍 焉

事の錯雜して、その意のよく解せられざる時、どういふわけぞと質問するこ

と。

何に似て、根源を尋問する意あり。

いかにしてと、道理を詰めていふ時に用ゐる。

奚　**曷**　**安**　**盍**

「**イヅクンゾ**」とも訓む。同條を看よ。

何不の合字なり。「**ナンゾ何々セザル**」と再讀の字にて、かく〳〵するがよしと、勸告する詞。例 子盍蛋自貳焉、左傳。王欲行之、則盍反其本、孟子。古文には、多く「蓋」の字を借り用ゐたり。

焉

「**イヅクンゾ**」とも訓む。同條を看よ。

【なんぢ】

汝　**爾**　**卿**

汝 賤者を呼ぶ稱。女の字も通用す。

爾 汝よりも稍や丁寧なり。

卿 主人より、家來に對していふ辭。「テマヘ」といふに當る。

にの部

【に】

乎　**于**　**於**

乎 于 於 略於、于と同じけれども、於よりは輕くして、於の如くに緩廣ならず。此の字はもと、句末におく字なるが故に、語間にありても上の字を助く。孔子世家に、已而去魯、斥乎齊、逐乎宋衛、困於陳蔡之間。詩經に、心乎愛矣。於に似て重し。于は主として、下に在る字に係る。於は體言と用言とを兼ねて係れども、于は體言のみに係る。例 友于兄弟、施於有政、論語。會于宋、春秋。入于海、論語。

于よりは輕し。上に在る字に係る。例 吾聞出幽谷、遷于喬木者、未聞下喬木、而入於幽谷者、孟子。

【にぎはす】

賑　**贍**

賑 贍 零落たるものを、ひきおこしてやる意。故に振と通ず。例 賑恤。賑給。

【にぐ】

逃

逃遁亡北脫 にげいづること。例 逃出。逃亡。逃去。避逃。逃走。

遁　にげかくるゝこと。例遁逃。遁世。隱遁。

亡　かけおちをする。にげうする。などの意。例逃亡。

北　敵にうしろを見せてにぐる意。例敗北。

脫　ぬけて、にげいづること。例脫走。脫出。脫兎。擺脫。脫營。

【にくむ】

惡　好の反對。强くにくみ嫌ふこと。

憎　愛の反對。面にくゝ思ふこと。

疾　嫉の字と同じ意にて、ねたみにくむ意。

【にごる】

濁　清、澄の反對。水に物のまじりたること。

溷　濁亂の意。

【にじ】

虹　雄虹にて、色彩の鮮明なるものをいふ。

霓　雌虹にて、色彩の不鮮明なるものをいふ。

【になふ】

荷擔　荷擔　天秤にてかつぐこと。又、負擔のことにも通用す。肩にてかつぐこと。

【にはかに】

俄遽暴驟卒　俄遽　事の急に起ること。又、程なくの意。例俄然。俄頃。あはたゞしきこと。あわてること。例急遽。遽然。思ひがけなく、はげしく急なる意。例暴かに卒す。風雨暴かに至る。たび〳〵急に起ること。例驟雨。「フト」の意にも、粗忽の意にも、忽遽の意にも用ゐらる。例卒然。卒倒。輕卒。卒に敵に遇ふ。

【にらむ】

睨　睨　斜視也と註す。横目にて見ること。例睥睨。

睚　目をはりつめて、まむきに、にらむこと。邪視の意なし。例睚眥之怨必報。

【にる】

煮烹煎　煮烹　煎

【に】

煮　汁のあるものをにえたゝすこと。例 煮沸。

烹　にとほすことにて、よく〳〵にること。煮よりも重し。

煎　汁あるものをにつめて、汁の失するまでにること。例 煎茶。煎薬。

似　似肖　似彷

似肖　異物・異種類の同様に見ゆるをいふ。例 類似。似顔。

同種類、又はにるべき理ありてにること。例 不肖。肖像。酷肖。

さも似たりと譯す。似つかはしきこと。例 彷彿。

ぬの部

【ぬ】

抜　抜抽　抜擢

抜抽　ひきぬくこと。えりてぬき出すこと。例 抜擢。選抜。抜出。

引きいだすこと。例 抽出。抽籤。

ぬけいづること。例 挺身。挺出。挺進。

同類中よりぬき出して、別に取分け扱ふこと。

【ぬすむ】

盗　盗竊　盗偸

盗竊　人の物を取りて、己の物とすること。例 盗用。竊盗。強盗。盗賊。

人目にかゝらぬやうに、そっと物をとること。例 竊取。竊盗。

人の注意せぬすきをはかりて、かすめとること。例 生を偸む。間を偸む。偸安。

偸盗。苟偸。

ねの部

【ねたむ】

嫉　嫉妬

嫉妬　己の及ばぬ處から人の長處を憎み、人の賢を害するをいふ。

妒と書くも同じ。嫉とも通用す。婦人の夫をねたむ「リンキ」をいふ。

【ねむる】

睡　睡眠　寝

睡眠寝　睡眠。寝寐。寝ねむりをすること。例 坐睡。昏睡。熟睡。睡眠。

目をとぢてねむること。寝處にねむること。例 眠食常の如し。臥眠。

臥床に就くこと。例 寝室。寝處。正寝。寝衣。寝具。寝臥。

寐　どこにても場所に拘らずねむること。例假寐。悟寐。夢寐。

瞑　唯目を閉づること。心のねむると否とには、關係せず。例瞑目。瞑想。

【ねんごろ】

懇　懇意。昵懇。懇切。懇願。懇意。

慇　へだてなくすること。例憂心慇々、詩經。

懃　たびく繰返していふこと。例通慇懃、（ホロソカニ思ハヌト云フコトヲ通ズル意）

苦　つぶさ（委曲）にいふこと。例苦請。苦求。

せひにと請求する意。懇よりも重し。

ののの部

【のこす】

殘　殘念。殘物。殘喘。殘餘。衰殘。

貽　あましのこすこと。例殘念。殘物。殘喘。殘餘。衰殘。

遺　後世又は子孫にのこすこと。

後に留めおくこと。例遺留品。遺言。遺産。

【のぞく】

除　除惡務本、書經。

蠲　はらふとも訓ず。とりのくること。例除惡務本、書經。

攘　さしゆるす事。例永蠲其家丁役、小學。

とりはらふこと。例攘之剔之、詩經。

【のぞむ】

望　遠方又は高所を見ること。例遠望。望樓。瞻望。望蜀。眺望。仰望。怨望。人望。

望見。望洋の嘆。一望千里。官位を望む。

臨　高きより低きを見下すこと。例登臨。照臨。君臨。賁臨。親臨。臨幸。

臨に似て狹し。顏出しすること。例朝に蒞む。中國に蒞む。蒞は「莅」とも書く。

蒞

【のぶ】

述　述陳。宣演。敍述。人の事業を受繼ぎてするにもいふ。例祖述。

自己の意思を口にあらはすこと。

著述。述作。陳述。口述。

陳　敷き列ぬること。數へ立つること。例敷陳。陳情。陳述。

宣　遍く世にあらはし、廣くのべ知らしむること。例傳宣。宣旨。宣告。宣言。

演　いひ廣めて了解せしむる意。例演說。演義。講演。演繹。演習。

敍　始終の順序を立てゝ云ふこと。「ツイヅ」とも訓む。例 敍述。自敍。

【のぶ】

伸　屈の反對。狹き物を廣く、短くちゞまりし物を長く引きのぶること。例 欠伸。威令伸ぶ。士氣伸ぶ。

延　長く引きのばすこと。例 延長。延引。延年。延齡。

舒　卷(木の葉の卷ける如き)又は蹙の反對。圓く卷きたるものをのぶる事、蹙まれるものを、のびやかにすること。例 卷舒。柳葉舒。愁眉舒。

暢　滯ることなく、すらすらと遍くゆき渡ること。例 暢達。

展　舒に似て開く意あり。例 展開。展覽會。親展。展望。

【のぼる】

登　上　登上に上る意。例 上天。上騰。上升。勢よくのぼること。例 升天。升位。升官。日の升る意にて、壯大のことに用ゐる。例 昇平。

升　跳りあがること。物の上にのぼるとは違へり。例 物價騰貴。物論沸騰。奔騰。

昇　暴騰。

騰　升と畧同じ。階をのぼることにも、官をのぼる事等にも用ゐる。例 陞敍。陞位。陞階。陞級。

陞

【のみ】

耳已而已爾　「ノデアル」の意。わけもなく輕げにいひすつる場合。語の終る詞にて、「コレダケデヤ」の意。

耳已而已爾　已よりは重し。已は而已をつめていへるなり。「バカリ」、といふに當る。耳に似て少しく重し。これば、かりぢや、の意。

【のむ】

飲　飲吞　嚥　液體をのむこと。例 飲酒。飲水。飯料水。飲宴。强飲。飲酌。暴飲。

呑　嚥　嚙まずして、丸のみにすること。例 鵜呑。併呑。呑舟の魚。

嚥　咽喉へ物をのみ下すこと。例 嚥下。

【のり】

法則刑律儀式典　法則、刑律、儀式、典、手本となること。

法　制度品式の儀。例 仁人法舜禹、荀子。

則　刑罰の義より出でゝ、常法の義となる。例 尚有典刑、詩經。

刑　人の形、物の形の上につきいふ。

儀　法式。

式　手本となること。例 儀式刑文王之典、詩經。

典

【のる】

乘騎駕　車の上にのぼること。それより何物にも上にのり居ることに轉用す。例 乘車。

乘　乘馬。乘船。

騎　馬にのること。例 騎馬。騎射。騎兵。騎手。精騎。

駕　車の轅を馬に結び付くること。それより車に上ることにも、車にて行くことにも、他に立ちまさることにも轉用す。例 車駕。御來駕。凌駕。枉駕。

はの部

【はか】

墳墓塚塋　墳、墓塚、塋、死者を埋めたる上に、土を盛りて目標とせるもの。

墳　死者を埋めたる處に、標を立てたるもの。

墓　死者を埋めたる處に土を高く盛り、目標の樹木を植ゑたるをいふ。

塚　一死者の墓のみならず、或墓地の一區域をいふ。先塋に葬る。舊塋に葬るなどいふこれなり。

塋

【はかる】

謀計　謀、計、籌策圖度量料測算議、人と相談すること。又、思慮を凝すこと。例 謀計。參謀。密謀。遠謀。謀略。智謀。權謀。陰謀。謀議。

謀　物の數を算ふる意より轉じて、豫想し、見積りを立つる意に用ゐる。例 會計。計度。計畫。早計。計略。設計。計策。

計

籌　算木のことにて、物の數を算ふる時の、數取に用ゐる者なり。それより、工夫策畧の意に轉用す。例神籌。籌策。

策　工夫し見込みを立つること。例計策。萬全の策。策畧。良策。

圖　重大なる事に對し。圖案を作りて見ながら思慮すること。例雄圖。後圖。壯圖大圖。遠圖。圖南の鵬翼。

度　物指にて、物の長短をはかることに用ゐる。例揆度。料度。忖度。測度。臆度。

量　桝にて物をはかる義より轉じて、物の多少輕重範圍、長短を見積ること。例度量。測量。商量。量見。

料　見識を以てはかり、欺きはかり、又、數をはかる意。例敵の强弱を料る。善く敵を料る。兵を料る。民を料る。思料。

測　水の深さをはかるより、物の距離をはかるに轉用す。例測量。推測。神變不測。測度。

算　算盤にて、物の數を計ふるより、物の多少の積りを立つること。例勝算。神算廟算。胸算。

【はく】

議　論議と熟して、相談すること。例物議を起す。協議。審議。正議。抗議。巷議。議題。

吐　呑の反對。口よりはき出すこと。有形の物體、無形の言辭にも用ゐる。例吐瀉吐露。呑吐。哺を吐く。氣を吐く。氣焰を吐く。

噴　口に含めるものをはくにも、氣息の塞がりてはくにも用ゐる。例噴飯。噴火。噴水。噴烟。

嘔　胃中より、幾度も續けざまにはき出すをいふ。自然に催してはく意。例嘔吐。

【はこ】

箱　物を入れて、藏め置くものにて、蓋のあるものをいふ。

匣　物を入れて、四面を圍めるもの。箱よりも粗末なるもの。

【はじめ】

初　主として、時間の上につきていふ。例初歩。初學。初年。初回。初心。當初。太初。

始　終の反對。主として事柄の上につきていふ。例始めて俑を作る。王道を始む。

創　始終。元始時代。始末。年始。
　新に事を起し始むること。始より強し。例創業の臣。創始。草創の際。創設。創意。

首　一番さきのこと。例卷首。唱首。首尾。

【はしる】

走　急に駈け出すこと。目的の方面に向ふことにも、にぐる時にも用ゐる。例逸走。疾走。敗走。退走。

奔　わき目もふらず、勢強く走ること。目的の方向を定めずに、はしること。例出奔。奔馬。奔流。奔命。奔走。淫奔。奔馳。

趨　小足にて、早く歩むこと。逃げゆくにあらず。例趨りて庭を過ぐ。趨りて退く。

【はす】

馳　先生に道に遭ふ、趨りて進む。

驅　馬に乘りてはしること。又、一直線にはしること。
　馬をうちてはしらすること。「カル」とも訓む。驅逐といふ時は。逐ひ出す意となる。

騁　馳に同じ。

【はた】

旌　旗に同じ。

旗　竿頭に羽を插みたるはた。

幟　のぼりといふものに同じく、龍虎などの如き模樣を畫きたるをいふ。

旆　軍陣に用ゐる標旗なり。漢書の注に、長一丈五尺。幅はその半なりと見ゆ。
　今日の吹流しのことにて、風に飜るもの。

【はだへ】

肌　身の皮をいふ。例肌粟を生ず。

膚　表皮をいふ。例膚凝脂の如し。膚淺。膚見。完膚なし。

【はぢ】

恥　恥辱。羞慚。愧忸。怩

辱　疾しきことありて、深く心にはぢ咎むること。「耻」と書くは俗字なり。例恥辱。破廉恥。廉恥心。
　「ハヅカシメ」と訓む。榮の反對にて、外聞のあしきこと、不名譽のこと。例屈

羞　辱。汙辱。侮辱。榮辱。凌辱。

慚　「ハヅカシガル」、「ハヂラフ」、「キマリガワルイ」などの意にて、恥よりは其意輕し。例羞惡。羞恥。

愧　恥に似て輕し。「慙」と書くも同じ。例慚愧。

忸　慚に似て重し。

怩　顏のあはせられぬほど、はづかしがること。常に忸怩と連用す。

忸　怩の條を看よ。

【はな】

花　華。

華　草木の花のみにいふ。花の古字世。草木の花にも、文華の義にも用ゐる。例英を含み華を咀ふ。

【はなす】

話　談。語。

談　「かたる」の條を看よ。

語　「かたる」の條を看よ。

【はなはだ】

甚　酷　太　苦。

「キツウ」、「ヨッポド」、「シゴク」、などの意にて、普通に用ゐらる。

烈しく、きびしきこと。例酷吏。酷署。酷熱。慘酷。

此上なき意にて、甚よりは其意強し。

酷に似て輕し。

【はなつ】

放　發　縱

放　手に持ちたる者をはなすこと。故に許す意あり。例放鳥。放兎。放鷹。放魚。放逐。奔放。

發　箭をはなつより出でたる字にて、內よりぱっと口のあく事。例發砲。勃發。風發。

縱　鷹、犬などの繩をゆるめて、自由にせしむる意。例囚を縱つ。羊を縱つ。兵を縱つ。擒縱。

【はは】

母　妣。

女親をいふ。

妣　亡母をいふ。禮記に生曰レ母死曰レ妣。

【はやし】

早　疾　速　夙　蚤

早晩の反對。日の出の時。又或一定の時よりもはやき意。例早朝。早晩。早世。

「トク」と訓む。徐の反對。足ばやに行く意。例疾歩。疾足。疾走。疾行。

遲の反對。例速力。快速力。神速。敏速。

未明の義にて、早よりは一層はやき時刻をいふ。過去の年月にも、人の一生の上にも用ゐる。例夙夜。夙に起く。夙に大志を抱く。

音義共に早に同じ。

【はらふ】

掃　拂　攘　擺　祓

箒にて物をはきすつること。靜にはくこと。例掃除。洒掃。掃塵。

急に物をうちはらふこと。例拂拭。拂除。拂去。雲霧を拂ふ。

追ひはらふ意。例攘夷。郤攘。攘除。寇を攘ふ。

手にて物を打振ふ意。例擺脫。

神佛に祈禱して、災禍罪惡等をはらひのくること。例大祓。祓除。

【はり】

針　鍼

針　鍼の俗字なり。

【はる】

晴　霽

布帛を縫ふ「ヌヒバリ」、又は醫療に用ゐる金銀のはりをもいふ。

晴霽

大空に雲霧なくして、はれたるをいふ。例晴天。晴雨計。

雨天のはれたるをいふ。例雨霽る。光風霽月。霽威。

【はるか】

遙　遐　杳　遼　邈

遠く離れたることの形容語。

遐の反對。遙よりも更に遠き所をいふ。例遐邇。登遐。

遠くかすかなる意。例杳渺。杳冥。杳として消息なし。

遙と同義なり。例遼遠。遼廓。遼絶。

遼と同義。